

特116

628

5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18

始





特 116

628

轉因術傳書

人生因緣看破と轉換法

發行所 心友社



特116  
628

轉因術傳書

人人生浮  
沈因緣看破  
と轉換法

大正

14. 9. 2

内交

發行所  
心友社



## はしがき

此度は佛家の所謂因縁を看破して之を轉ずると云ふ事に就いて、轉因術と名けて講義録を上中下の三卷として發行する筈の處、信仰とか修養とかの研究の尙淺い青少年諸君の爲め、其の大體を『人生浮沈因縁看破と轉換法』と名けて、之を單行本として一般的に普及し、尙進んで研究し度いと云ふ特志の人は、更に進んで轉因術講義録をお読み下さい。轉因術講義録は上下二卷になつてをります。

さて本書は其の轉換法を説くに、最も平凡の語句を用ゐてあるのは、少年諸君にも其意味を通じたいとの老婆心からでありまして、其の平々凡々の卑しい言葉の中から此の因縁因果の大理を看破悟得せられたならば、述者の喜びは甚大であります。

さう云ふ次第でありますから、勿論人がアツと云ふやうな奇抜な語句は用ゐてありませんから、お見落しのないやうに、述者の述べんとする所、傳へんとする深い意味を



二  
欄み出して諸君のものにせられんことを希ひます。蓋し本書を一讀せられた後は、他の之に類する書物を讀むにも。人間一生の活動に就いても。鮮からず御參考になること、信じます。

尙且つ一言すべきは、本書は特に冗文を省き、僅々百二十頁以内に切り詰め、讀者の眼の勞を省き、而して眞實の妙所を見落されぬやうにと、特に意を用ゐたる點を諒とせらるゝやう希望します。

述者識す

人生因縁看破と轉換法目次

一、眼あき千人……………一  
二、希望は單純なれ……………四  
三、人間生涯の標準……………六  
四、死ぬまで病氣に罹らぬ……………八  
    イ、病氣は自然ではない……………八  
    ロ、靈の波動から來る病氣……………一〇  
    ハ、病の元は心の偏りから起る……………一一  
    ニ、病の因縁を轉じた實例……………一二  
    ホ、食物から種々の因縁が現れる……………一四  
    ヘ、信仰的の病氣轉換法……………一六  
    ト、毒を含んで戻て來る靈波……………一八



チ、求めよ一路の寶庫あり……………二二

リ、油斷すな無理押しの因縁……………二三

ヌ、正法に不思議なし……………二五

五、必ず長命が出来る……………二六

イ、天折豫防と長命法……………二六

六、生活の安定……………三二

イ、倒産は奢侈と利息から……………三二

ロ、家運挽回は一刀兩斷のみ……………三四

七、社會的の事蹟を遺せ……………三五

八、家庭を樂土にせよ……………三七

イ、家庭の基礎は夫婦……………三七

ロ、家庭組織と秩序……………三八

ハ、因縁から成り立つた家庭……………四四

ニ、最も有功にして最も危険なる女性……………四六

ホ、月にむら雲花に風……………四七

ヘ、家庭に大事な芝居……………四九

九、子供の出来る轉因法……………五〇

イ、親の恩子の恩……………五〇

ロ、授かる焼餅子……………五五

十、財産増殖の手段……………五六

十一、老後の幸福と安心……………五九

イ、一代の因縁因果の總勘定……………六〇

ロ、因縁推讓の妙味……………六二

十二、向上再生の準備……………六四

十三、子孫に譲る幸福……………六六

十四、一代の運命循環時期……………六八



附録 轉因修養

イ、伸びるの道……………七四

ロ、報恩謝感……………八一

ハ、自らを知れ……………八六

ニ、開運榮達……………九〇

ホ、青年立志……………九五

ヘ、懐て下駄を穿くな……………一〇〇

人生 因縁看破と轉換法

吉村紫雲述

一、眼あき千人

世の中は眼くら千人とも眼あき千人とも云ふ。眼あき千人と云ふことは、傍の人に眼があると云ふ事で、つまり御當人に眼が無いと云ふ事を意味して居るのであります。昔神佛聖賢を師として、形而上の學即ち精神界の活動を演じて居た頃は、有爲俗達之士、卓見卓識の人があつて、支那人からは日本に三眼ありと評判せられて居つた事もありました。三眼とはどんな眼でありませうか、三つ目小僧と取り違へてはいけません。此の横に切れた二つの眼は形而下の物質界の現象を見るだけの眼でありまし



て、形而上の精神界は少しも見えませぬ。乃で此の二つの眼の外に額の真中に豎に切れた一つの眼があつて、其の眼で形而上の精神界をば隅から隅まで看破し裏から表まで突き透して見るのであります。佛教の方では之を一隻眼と稱へて居ります。一隻眼とは即ち一つの眼と云ふ事で、護法神などの中には、此の一つの眼を現はした姿もあります。さて此の一隻眼は親が生み付けて呉れませぬから、尋常一様の人には、決して有りませぬ、若し有つたら眉に唾せねば、それは化物であります。然らば此の目は誰が産み付けて呉れませう乎。之は言ふ迄もなく神儒佛三道の師匠が生み付けて下さるのであります。そこで昔は此の師匠の恩を非常に尊重したものであります、佛法では四恩と申して第一を父母の恩、第二を衆生の恩、第三を國王の恩、第四を三寶の恩と立て、あります。その三寶の恩なるものが即ち此の師匠の恩であります。此師匠の恩を何故に三寶とて、寶と云ふ字を付けるかと云ふと、師匠の御蔭で此の一隻眼が開ける、其れと同時に今迄の天地の秘密がからつと開け、萬物の實相がむき出しに現

はれまして、それを看ると同時に、人天の導師となつて神佛聖賢の御手傳ひを勤め、一切衆生のお世話をし、此の世の寶と成りますから、之を三寶と稱へたものであります。

此の一隻眼が具はり開けますれば、自己の因縁運命を看破する位は、朝飯前であります。けれども悲しい事には、以前は譯の解らない愚民が親殺し主殺し夫殺し妻殺し等の亂暴をして居つたが、此頃では能く譯の解つた國民の上位に立つて居る、政界の名士とか、會社の重役とか云ふ人達が、破廉耻非道の罪人と成るに至りました。之は皆横に切れた二つの眼だけの所有者で、大切な豎に切れた一隻眼が開かないからであります。明日の因縁どころか今夜の因果をも看破り得ぬ人々であります。

彼の日清、日露、日獨の戦争を考へて見ましても、横に切れた形而下の物質的の眼で見れば、どう考へても日本に勝味の無い勘定でありました、けれども具眼の人が豎切れの眼で見ますと、生粹なる日本魂を以て彼等の雜駁なるポロ魂に當るのは、丁



度鐵鎚を振つて房州石を打碎くやうなものであると云ふ事が、初めから見えて居たのでありません。そこで物質界だけ見える横切れの眼は、道具立てや飾り付けで眼が晦んでしまひますから、盲千人の仲間入りになります。堅切れの一隻眼の方は道具立てや飾り付けの物質には迷ひませぬから、眞理を見出し、自己の運命は勿論國家の前途も世界の將來も、よく突き徹ふして見抜き得る次第であるから、世の中を盲千人と勘違ひして居ると、自ら深みへ落ちて行くばかりであります。眞理は眼あき千人でありますから、此眼あき千人の方を對手にしなければ幸福は得られません。

## 二、希望みは單純なれ

私共人間は最高の動物で知識が具はると同時に、種々の望みが起ります。世は開け人智は進む、それと同時に小さい子供までが、偉い人に成り度い、金持ちになり度い年頃になれば良い妻が持ち度い、優しい夫が持ち度い、精神に慰安を得たい等、種々

離多の脊負ひ切れぬ程の望みが起ります。けれども餘りに望みの多いのは、一つとして成就しません。そこで私共は最も深い痛切な望みの一事を以て最初の目標として進むのが宜しい。其の間他の望みは犠牲とします。それで一つの望みが叶へば次に第二の望みに移ります。斯くすれば必ず志望は達し得られるのであります。

凡そものには都て標準があります。物の價にも元値と云ふものがあります。之は百人千人集まつても餘り狂ひの無いもの、之が標準であります。又食物でも加減と云ふものがあつて、百人千人が喰べて見て味ひの可い所が標準であります。人も亦此の世に生れ来て、ごんな一生を送つたらば、可い加減でありますか、即ち標準はごんな程度でありますか。

此の問題を眞先きに考へて見ないと、因縁因果や運命を口にする事は出来ませぬ。此の標準を一つ定めて見て、それから標準以下の人が初めて因縁が悪いとか、運が良くないとか言ひ得るのであります。若し不幸不運の因縁を引いて、標準以下に陥つて



居る時は、此に望みを起して因縁を轉換する必要が有ります。又幸福の果を得て標準以上に生きて居る人は、それ以上の望みを遂ぐる爲めに、良因良果を招いて、世の爲め人の爲めに働く可きであります。であるから望みは單純にして必ず成功するの途を講せねばなりません。

六

### 三、人間生涯の標準

私共人間はどんな一生涯が標準かと云へば、人により、見方により、考へ方により、各其の標準が異ふでせうが、私はかう思ひます、否望みます。

- 一、生れてから死ぬまで病氣に罹りたくない。
- 二、成るべく長命でありたい。
- 三、生活に困りたくない。
- 四、人を助け世の爲めに成る仕事をして置き度い。

- 五、良い夫を持ち、良い妻を持つて、楽しい愉快な家庭を造り度い。
  - 六、澤山は困るが二三人の子供の親に成りたい。
  - 七、澤山は要らぬが生活の保障の出来るだけの準備財産が欲しい。
  - 八、老後は子供に父さん母さんと大切にして貰つて、何の苦勞も無く死にたい。
  - 九、死んだら此の世以上の幸福な人に再生したい。
  - 十、死んだあとは、子も孫も同じ様な幸福な運命を繼續させて遣りたい。
- 貴賤貧富皆おしなべての望みは以上の如くでありませう乎。して見れば私共の生涯の標準はざつとこんなものかと思ひます。此の標準に足りない人は不運不幸の因縁、此の標準に過ぎたる人は幸福幸運の因縁なりと初めて言ひ得るのであります、所が世の人は此の十箇條の中に必ず過不足があります、乃で私共は大々的努力を以て、過不足の因縁を看破して轉換法を講じ、標準に併行せしめねばなりません。否標準以上に向上せねばなりません。

七



#### 四、死ぬまで病氣に罹らぬ

八

(イ) 病氣は自然ではない

凡そ人生の病氣程辛い悲しい事はありません、之は全く因縁因果の現はれと見ねばならぬ。何故かと云へば、宇宙の眞理は何物でも殖さう／＼として、大きく／＼と育て、行くのであります。それだから途中で萎びたり、夭折したりするのは、即ち不自然でありまして、決して自然界の完全な現象ではありませぬ。それであるのに、健康でなく弱い身體を持つて居ると云ふのは、その原因がある。原因とは所謂因縁因果と悟らねばなりません。原因にも先天的(生れぬ前)のものと、後天的(生れて後)のものがあります。

さて病氣になり、弱い身體に成つて見ると、氣は弱くなり、神經は過敏となり、甚だしきは人を恨み世を呪ひ等して、悲觀の極に陥ります。それが爲めに益々因縁を深

く濃く育てる事になる。自然界では藥草がズン／＼と育つが如く、毒草でもズン／＼と育ちます。して見れば之は獨り植物のみならず、人間吾々にも其の理がありまして病弱を悲しんだりぢれたりすれば、丁度毒草に肥しを與へるやうなもので、物質的に藥を服んでも養生をしても、病は充進するのみで、萬物を増殖するの理を推して、終に取り返しのつかぬ事を來たして了ひます。でありますから眞理の殖さう／＼進めやう／＼とする力を自分等に有利な方面に利用するのであります。

乃で祈禱とか、靈術とか、禁厭とかを行ひますと、兎に角痛みや苦しみは藥になります。信仰的な事でも、名醫を訪ねて診察を乞ひ、脈を見て貰ふ、名醫は「よし／＼良い藥を上げるから安心なさい」と言つて呉れると、それを聞いたばかりで痛みも苦しみも幾分藥になるものです。で、昔から病は氣からなご、云つて、精神上から重くも軽くもなるものとして居ます。然し之は一時の現象でありまして、心持だけでは重い病氣の治るものではありません。かう云ふ次第で、人間生れてから死ぬま

九



で病氣をせぬと云ふのが原則で、若し病む事あれば、其は因縁來れりと考へねばなり  
 ません、日蓮宗の行者に伺ひを立て、貰へば、必ず障りとか祟りとか、或は罪障なり  
 と言ひます。そして禱りを頼みますると、罪障消滅と稱して信仰に基かせて、朝夕題  
 目を唱へ一心不亂に修行をさせます。其結果一日に縦ひ一時間でも二時間でも意識を  
 題目に振り向けて一念一向となりますから、偏位の精神が正しくなる、そこで偏位の  
 現はれである病氣が快くなるのであります。けれども日が経ち月を過ぎると又々持  
 て生れた偏位性が現はれて、病の再發となります。今度は前程に祈禱を信じなくなる  
 から、前の時ほど効果が現はれませぬ。

(ロ) 靈の波動から來る病氣

偏位とは、心の偏り、今少し悉しく言へば人並とは幾分異つた心であります。先づ  
 病の人、弱い人に就て試みて御覽なさい、必ず其の人の心は普通人とは異つた所があ  
 りますから、此異つた所が持つて生れた因縁であります。又靈の波動で病氣する事も

ありますが、之はこちらに其の靈の波動を受ける特別の装置があるからで、如何に靈  
 の波動が渦巻くやうに突進して來ても、こちらに其れを受ける装置がなければ、決し  
 て受けませぬ。丁度當時流行の無線電話のやうなものでありまして、空中に一ぱい充  
 満して居る電波も、こちらに受信の設備がなければ、感受するものでありませぬ。そ  
 れも求めて其の様な厄介な機關を装置するのではなく、全く持つて生れた特性とも云  
 ふべき即ち因縁を背負つて居るのであります。そして此の靈の波動は主として微菌慢  
 性の病、神経的の病となつて現はれます。又自分の造つた因果則から來る場合も中々  
 多いので、餘程修養せねば是等の區別を見別ける事は困難であります。

(ハ) 病の元は心の偏りから起る

以上述べたやうに、病氣と云ふものは、自分の心の偏りから出るので、靈の波動を  
 受ける場合とに限られて居るとも言ひ得るかと思ひます。であるから、心の偏りを正  
 しくし、波動を感受する装置を撤廢する事を、修行せば行者や靈術家を頼むまでもな



く、必ず全治します。結局生れてから死ぬるまで、病氣をせぬでよいものを、實は因縁に引き廻はされて居るからであります。一寸一例を示してお話しませう。

(二) 病の因縁を轉じた實例

私の知人が先頃、俄かに左の手が痺れたので、驚いて醫師に診察を乞ひました。其人は年齢も五十才ですから、案の通り動脈硬化でありまして、血圧百七八十ミリありました。それで大變に充血して瞳孔は小さくなつて居たさうで、思へば腦溢血の前兆で身慄ひするやうな危険性を帯びて居ります。乃で私は其人の平素の特性や好き嫌ひを訊ねて見ますると、煙草が好きで一日に朝日煙草を三個常用するとの事で、食物では酔いものが嫌ひだと云ふ。此二點だけで其の因縁の現はれてある事が首肯出来るのです。それで早速煙草を止めなくも宜しいが半減する事、毎日酔い物を多量に食べる事、此の二つに因つて因縁を轉じ得ると言ひ聞かせました。それから即日煙草を一個以内に減じ、夏みかんを毎日一個づゝ喰べる事にしました。丁度一週間に血圧を計

つて見れば百六十五ミリ、二週間目には百六十ミリ弱、三週間目には百五十ミリ以内に下りました。爾來何回血圧を計つて見ても、百四十七八ミリに落付いて居ります。五十才位の年輩で健康體であれば百四五十ミリは壯健の兆ださうです。所で其の人の左の手の指先の痺れがまだ直り切らずして残つて居て取れませぬから、脊中に大きい灸を勤めて點えさせました。其翌日から痺れは取れて了ひました。

次に胃病の一例をお話しませう。或る人が何を喰べても容易に消化しませぬ、胃散や胃腸薬を持薬にして、軟かいものばかり喰べて、それで腹の空くと云ふ事は殆んどありません。であるから常食はお粥とパンです、私は笑ひました。何年位胃が悪いかと聞くと、五六年の間少しも消化しません、私の胃は消化力が無くなつて了つたのでせう、或は胃癌の前兆かも知れませんが。私は飛んでも無い事だ、明日からモット硬いものを喰べなさい、然し當分の内は何でも腹一ぱい喰べてはいけない、腹八分と云ふけれども、今少し減じて腹半分位に止めて置きなさい。そして喰べ物は何



んでも膳に上つたものは品を擇ばず、極めて少量によく嚙んで喰べ、次の食事までに腹の空くのを目標になさいと勧めました。

それから其人は私の言つた事を信じて、翌日から何でも彼でも硬いものを。恐る恐る少量に喰べ、結果如何と待つて居る、アラ不思議や朝の食事がすんでから、一時間二時間経つてそろ／＼痛みはせぬか、胸が張りはせぬかと心配して居ると、丁度晝時分になると久しぶりて腹が空いて來た。之は不思議と又晝食にも硬いものを少量、無論お粥もパンも止めて普通の飯を食べたのです。別段變つた事も無く、夕食前にはキチンと空腹になる、かうして毎日／＼半年程連續した結果は、全く健全な胃となりました。

(ホ) 食物から種々の因縁が現はれる

どうして病氣はかやうに食物に關係するかといひますると、眞理は餌あつて生きものが生ずると云ふのが原則であります。餌の無い所には生き物は棲息しませぬ。此に

至ると話は信仰的の境に入りますので、春夏秋冬四時に種々様々の食物を天から供給せられて居りますのは、都ての動物に喰べさせるが爲めでありませう、此の喰べ物によつて各々其の生を保ち萬物増殖の法が行はれて居るのであります、百種の草を集めて薬を造ると傳へられてある通り、百種の草を集める中には恐ろしい毒草もあるでせう、又其反對に其の毒草の毒の成分を消して了ふ薬草もありますから、つまり百種の草を集めれば薬になるのであります。之は獨り草のみではありません、野菜の類も魚鳥の類も皆然りで、百種を集めて喰べて居れば自然に叶ふので、健康にもなり、天壽を全ふすることも出来るのであります。他の動物は自然に備つて居る食物を眞直に喰べて居りますのに、獨り人間のみは、之は好きなり、之は嫌ひなりと、區別を立て、食たり食べなかつたりして、勝手氣儘をしますから、他の動物の如くに自然に伴つて行きません。殊に食物を撰り好みする人には病氣持ちが多いのは此理によつてあります。



讀者中に病氣を持つて困つて居る人は、先づ手始めに食物の改良が、第一轉因法であります。決して自ら撰り好みをせぬ事、膳部に上つたものは天からの御馳走、只今の我の食祿と心得て、嫌ひなものでも必ず食べる、好きなものでも度を過ぎぬやう。次の食事には必ず空腹するやうに目標を立て、練習することが因縁轉換法の第一であります。

### (一) 信仰的の病氣轉換法

次は信仰的の轉換法でありますが、此の信仰と云ふものが、中々いゝ加減のものでありまして、眞の信仰に入ると云ふ事は、萬綠叢中の紅一點で、先づ多くの人の信仰と云ふのは、劍術を知らぬ人が鎧兜に身を固め長い刀を差したやうなもので、見た所は一かごの武藝者のやうではあるが、イザ斬り合ひとなれば、却て鎧兜や刀が邪魔になる、裸で棍棒の一本も持つて居る方が役に立ちます。下手な信仰は依頼心を起すのみで、人間を愚に陥れる虞れがありますから、之は大に考慮を要します。そ

れは普通の人は信仰と云へば、神佛を拜んで願ひ事を頼むと云ふ事でありまして。之も靈の波動を避ける一方法でありますけれども、多くの人は一心が足りないから、價値の無い事が多いのです。元來手重い病氣や長い病氣に罹るのは、一朝一夕の事ではなく、長い月日の因縁が積り／＼して、それが形に現はれたものでありますから、神佛に禱ると同時に積つた因縁を解いて行かねばなりません。されば因縁と云ふても、食物の因縁もあれば性質の偏りから來るものもあり、先天的のもあれば、他靈の波動を受くる事もある。そこで食物の事は前に説いた通り、好きを減らし嫌ひなものを食べるやうにするので、之は誰にでも出来る修行であります。先天的のものや親からの遺傳に就ての因縁は、食物や性質の偏りを正し、他靈の波動を避ける修行によつて之も避け得るのであります。

最も六ヶ敷いのは他靈の波動を避ける事でありまして。どうして他靈の波動を受けるかといひますると、こちらに其の感受性があるからであります。譬へば一尺の箱の中



へ一尺の物が這入て居れば其の隙間がありませんけれども、若し一尺の箱の中へ九寸五分のものを入れ、ば五分の隙間が出来る、其の隙間へ他靈の波動が這入り込む、かう云た理であるから其の隙間の無いやうにするのであります。乃で又其の他靈の波動と云ふものは、縁も由緒もない所へ飛び付いて来るものではない、多くは皆元と自分から出發したものが反響の如くに歸つて来るので、言ひ換へれば自分から出發した靈の波動が、今度は毒素を含んで元の古巢へ歸つて来るのであります。古語に己れより出で、己れに歸ると教へてある。

(ト) 毒を含んで戻つて来る靈波

さて自分から出た靈の、波動が、毒素を含んで自分の方へ歸つて来ると云ふ條理をお話しませう。此のお話をするには、一應神とか佛とか云ふものに就て、それからお話をせねばなりません。此信仰のお話は物質を離れたやうに見えて居るけれども、どちらとも同じ事であつて、精神界は森羅萬象萬物成生の原理、物質界は其の原理によつ

て形に現はれたものであります。であるから幽冥界として幽靈や魔神の住んで居る別世界と思つてはなりません。吾々の此の坐つて居る所が物質界であり且つ精神界であるのであります。されば神佛と稱するものは何であるか、之を判りよく言ふて見やうなら、萬物を成生撫育する力であり、神の力は萬物を少しでも大きくしやう、少しでも數多く殖やさう、と云ふ仕事に寸分の依怙の沙汰はない、鐵道線路を汽車が走るやうに、キチンと軌道のあるもので、少しの無理も許さない。少しでも地中に無理が出来れば、必ず地上に地震が起つて、其の無理を埋め合せるのであります。之は天體や地球ばかりではなく、人間の身體にも此の大真理を受けて、人間と云ふ形が現はれて居るのでありますから、之も亦少しの無理も許されませんが、人間は意識があり、智慧があり、情があるから、何時の間にか、軌道を外して居ることが多い、右へ一尺外せば必ず左へ一尺引戻さねば天地自然の真理たる埋合せがつかまされぬ。丁度分銅を糸で吊ら下げて中心より右へ一寸引けば其のはすみで中心より左へ一寸行くやうなも



ので、決して右へ引張り切りに中心を外して止まつて居るものではありません。されば神佛なるものが、左様に大づかみにして而も一體とすれば、金比羅不動辨天觀音様と種々の神佛があるのは似せ者かと云ふ疑問が起ります、之は大元の神の働きの中にそれ／＼特色ある専門的の働きを尊稱して、其れに適當な御名を附して信仰の的にしたものである。譬へば鐵道省では大元縮は鐵道大臣があり、其の外には、運輸課長も車輔課長も保線課長も機關課長もあり、其他にも機關手も車掌も驛夫もありまして皆其受持ちが異ひ、仕事が専門的であり分業的であるが如く、神様でも大體を總括主宰する大神靈、熱を與へる働きの神様、水を與へる働きの神様、地球を明るくして下さる神様、と云ふ工合に、一つものを小かく分解して名づけた御名であるから、是等に迷はないやうにせぬと、信仰心を起して却て迷心の愚に陥つて了ひます。

であるから、萬物生成増殖の原理の中に棲息して居る人間が勝手に因縁因果を造り其の反響を蒙つて、神に助ける治せと無理頼みしても、利益も効果も無いのが當り前

ではありませんか。固より神佛は人間に對しては、少しも長く生きさせやう、病氣はさせまい、生活にも困らせまいと、日夜守護下さるので、その洪大なる御慈悲を勝手に受けないから、様な病氣になるのであります。と云ふのは吾々が病氣になつても直ぐに神様が飛んで來られるのでは無く、生れると同時に、人には自然療能力が具はつて居るから、體内へ黴菌や毒素が浸入すれば、白血球の活躍が起り、其他あらゆる防禦作用が發して、吾が體を損ふものを外界より入れぬやうになつて居ります。それにも拘はらず、吾が體を侵かされるのは、一尺の箱に九寸五分の物が入れてあるから、五分の隙が出來て居る、是等は自分の油斷と知らねばなりません。

(チ) 求めよ一路の寶庫あり

それで自己の中心と云ふものを一度確と認めなければ、一切の解決が着きませぬ。一生涯中心なしでフラ／＼して居る人は、實に不幸な人であります。中心とは何か、我々は大神靈の働きによつて此の世に形を現はし人間の體を構成し、神佛同様の働き



を持つて五十年乃至七八十年間、神佛同様に萬物を成生しなければならぬ役目である  
 と、かう考へると吾々の人格もウンど高くなるではありませんか、であるから、我々  
 には神佛の素質を持つて居る。それを彼の心王敎創設者の西村大觀氏は心王と名けて  
 居られる故に大宇宙に心王と云ふ元締があつて、吾々の頭にも心王の一部が具はつて  
 居て、常住不斷大宇宙と感應道交して居る。斯くの如く少しも無理の無い條理の正し  
 い、理に因つて形を現はして居る人體を持つて居る吾々は、矢張り大心王の大道則に  
 従はねばならぬ。其の道をウカ／＼と外すが爲めに、其の埋め合せは肉體の上に現は  
 れるのであります。

此の大神靈から起つて来る、全宇宙の不思議の働きを。間違ひなく見る事の出来る  
 のは、即ち佛敎で謂ふ一隻眼であります。されば此の偉大な神靈の働きを見破つた所  
 で、どうすればよいか、それは簡単に言ひ現はし得るので、人我共に都合のよいやう  
 に、此の世に生活するのであります。自分に都合のよい事は多く人に都合が悪い、自

分に利益な事は多く人に損をさせる、故に日々の言語や行動は、深く慎み恐れて、其  
 場其時に従ひて少しも無理押しをせぬ事である。少しでも無理押しをすれば必ず其の  
 反響が自分の身體に戻つて来るのは火を賭るよりも瞭らかであります。如何に闇夜暗  
 室で無理な事を（悪事ばかりを云ふのではない）すれば、其言語行動に就ての一つの  
 因を造つたのであるから、其の果は必ず受けねばならぬ。

(リ) 油断すな無理押の因縁

私が此にくどくどしく言ふのは、決して悪事の事を云ふものではありません。悪事を  
 犯せば悪いと云ふことは、三歳の童子もよく知つて居るが、私の言ふのは、無理押し  
 であります、誰でも俺れは生れて以來悪事は働かぬ、人を泣かせた覚えはない、因縁  
 因果の来る筈がないと主張しますが、成る程悪事は働かぬまでも無理をして居ります  
 權勢を利用した無理、金力のあるに任せた無理、智恵のあるための無理、其他自分の  
 過ちや考へ違ひを心づかずして、人を恨み人を罵り悪念を燃やすなどが、皆因となり



果となるのであります。是の如き因縁論を聞く人は、何んだつまらない、昔の地獄極樂の話のやうだと思ふ人もありませうが、私の言ふ所、述べる所は、左様を迂遠な話してはありませぬ。現在即今に吾々が日々繰返して居る事實談であります。科學萬能物質専門の人は、物質科學の原因結果あることのみを知つて、靈界の因縁因果を無視して居ます。それだから堂々たる一流の紳士淑女なり、智者學者なりと世の尊敬を受けて居る者でも、思ひもよらぬ恥かしい行動を敢てし、新聞の三面を賑はして居ります。是等の人々は物質上で上手に世を渡り文學的だとか、藝術味を發露したとか、都合のよい附會説で押し居りますが、靈界眼から見れば慥に因縁に引かれたのであります。然れども自分の行動が實際無理か無理でないかと云ふ事は、其の觀察が非常に六ヶ敷いのです。多くの人は矢張り自分は悪くない、向ふが悪いと判斷するので、承知しながら無理を押しやうになります。苟も因縁を避け度い人は、深く此の點に心して自分の言語や行動を監督せねばなりません。

(ヌ) 正法には不思議なし

こんな具合に因縁を引いて、病氣となつて現はれるのでありますから、病氣にならぬやうに平生用心するは勿論であります、けれども一と度病の身となつた上は、狼狽せずして、徐ろに日々一事一物に注意を拂ひ、殊に從來の偏つた心、偏つた性質等を反對にするやうに心がけ、明け暮れ神佛にお詫をする云ふ意志で、全くの神佛や菩薩のやうな心がけになれば、日一日と必ず快方に向ひます、之について實例を挙げれば、實に澤山ありまして小冊子には掲げ切れませぬ。私の説は至極平凡のやうに聞えませうが、之は私が永年實驗し且つ自身にも行じて成功し、今は些の疑ひもありません。世に奇抜なる説を用ゐて、多衆を煙に捲いて居る靈術家や祈禱者も少くはありませんが、皆さんが此の轉因法を實地に行はれたならば、其等の靈術家祈禱者を下に見ることが出来ます。世の中に正法、即ち眞理には奇抜だの不思議だの云ふものは決してありません。火の上に水を載せれば熱くなると決まつて居ります。只物質的の



二六  
事は一々學理で實驗が出来て、悉く證據が舉りますが、精神界の事は一切無形の沙汰のみで證據を眼の前に突きつける事が出来ない、それだから、世の人が信じないので、信じないから物質には智力で成功しても、精神界の方からは無理の反動で、見るも慄れな悲惨を醸して居るのであります。病氣に就て尙ほくわしく述べたいが、此邊で打ちりにして之に對する詳細なる説明は更に講義録で述べる事にします。

### 五、必ず長命が出来る

人の長生きと云ふ事は、誰も望む所でありますが、さて平素はこんな事は考へて居らない、病氣に罹るとか、年を老るとかの後に思ひ出されるものであります。此の轉因法は病に罹らぬやう、罹つても治す法に因つて、大體の結末がついて居りますけれども、尙ほ確實の轉因法即ち天折豫防法を述べませう。

#### (イ) 天折豫防と長命法

- 一、絶対に腹を立てぬ事
- 二、食事は常に八分たる事
- 三、色慾を亢進させぬやう注意する事
- 四、食物の撰り好みせぬ事
- 五、菜食七分、魚肉二分、獸肉一分
- 六、心に無理を考へぬ事
- 七、讀經、謠曲、音曲、園藝等を趣味とする事
- 八、日々感謝生活をなし少しも不足心を起さぬ事
- 九、心を落つけ身はこまめに働く事
- 十、人を信仰に導き、神社佛閣の堂宇の修繕其他多衆の助かる事を爲し、ものゝ命を助ける事

人間が腹を立てぬとは一寸六ヶ敷いが、心にかけて居れば誰でも出来ます、一度怒



ると數萬の白血球が破壊されるそらで、家康の文句では無いが眞に怒りは人生の敵です。怒りは壽命を縮める最大手段であります。

食事はいつも八分、今少し欲しいと云ふ所で切り上げることが大切であります。生きものご食物ごの量は自然に定まつて居りますから、一椀慾張つて食べれば、何人か他人がそれだけ飢えて居るのです。之は秘中の秘事であります。古人が徳を譲れと云ふのはこんな事です。食を譲れば世の飢えた人が助かる。つまり間接の人命救助であります。一椀食れば人を飢えさせるのです。かう考へては口に合ふからとて、腹十二分には食べられません。此の因縁は三百六十五日三度づゝの事でありますから、非常に有力な轉因法であつて、此の術では極めて重大であります。

副食物は決して撰り好みをしてはなりません。膳に上つたものは即ち天から下さつた食祿、春夏秋冬野に生へ山に出来、海から上つたものは皆吾々の天の食祿であります、但し自分の特に好むものは、少量づゝ回数多く食するのは結構です。之は自身獨

特の自然の要求で一面から云へば、自分に適した食物を天から命じて居るのです。如何に好きでも多量はいけません。

長命がしたければ、西洋人はいざ知らず、吾々穀食本位の人間は、菜食を第一とし、魚肉を次とし、獸肉を第三とします。獸類でも肉食の動物と草や藁や木の實等を食へる動物とは腸の長さや組織が異ひます。吾等は先祖幾千年前から米穀や野菜で遺傳して來て居るのですから、今急に明治大正だと、西洋かぶれに陥つて、肉食動物の眞似をしては長く生きられません。今五百年も千年も経てば、そろ／＼肉食人種的に腹の中の組織も遺傳的に變つて來るでせうが、まだ／＼三十年五十年位では菜食人種の圈内は脱しません。だから副食は菜食七分、魚肉二分、獸肉一分が宜しいのです。心に無理な考へを起してはなりません。無理な事でもなくとも、大體考へ事は悪いのです。世渡りの上に於て全然考へ事をせぬわけには行きませぬが、努めて此の時間を短かくするのです、虚心平氣の時間を多くして、あまり必要でも無い考へ事は一切せ



の事、家康は一日に念佛を幾萬とか申して居たそうで、矢張り身を害する忘念忘想を念佛で追つ拂つて居たのでせう。尤も物事を工夫する考へ事、例へば學生が算術の問題を考へるなどは、差支へないのです、なせならば直ちに答が出来て解決するからです。考へ事でも解決が着けば頭はサツと開くから害になりません。其れに反して考へれば考へるほど、氣分の悪くなるやうな考へ事、即ち過ぎ去つた愚痴、未來の不安、他人を疾み憎み恨み等する考へ事、考へれば考へるほど、修羅道に落ちて、頭は亢奮して大害を起します。之も壽命を甚だしく縮めるのであります。

これからの世は、昔のやうに神信心をなさい、佛詣りをなさいと云つた所で、どても行へませぬ、さればとて毎日の職務に心身共に勞れてのみ居ては、精神の肥料は絶無になります。そこで信仰を好む人は讀經も結構、修養講話を聴くもよし、修養書を讀むもよし、謠曲、音曲もよし、閑のある人なら園藝も大によろしい。これは心に肥料を與へるので長命に必要な條件であります。

次に又必要な事は感謝生活であります。何事でも朝から晩まで、有り難い〜と喜び暮す事で、轉んで膝頭をすりむいても有難い、それは大怪我でなくて仕合せと喜ぶかう云ふ工合にごこまでも喜ぶ心を擴大して行くのです、此の術はやがて長命のみならず、開運無病息災の導きであります。不足心を起すのは、ます〜心をどん底へ落して行きます。

次はせか〜してはなりません。極めて落ついて居る事です、急がねばならぬのは、自分が怠つて居たからです、停車場へ行つて見ると、バタ〜と馳て居る人が多い、今五分か十分早く家を出たならば、あのやうにはた〜走らずともよいものをと思はれます。之は停車場のみではなく、何事でも幾分のゆとりを造つて置いて、ばた〜せぬやうにしなければ心の落付きが出来ません。そして身を軽くこまめに働く事が必要であります。

佛教では功德を積と云ひまして、之も矢張り徳を讓る事でありませぬ。迷つて居る人



を信仰に導びき歡喜の生活に移らせる事、又神社佛閣の荒れ果てたものを修理して世に出す事等も極めてよい事で、其他道路の悪いのを直し、暗い處へ燈りをつけて夜道の人を助け、橋なき所に橋を架けて人の足を助け、身投げ首纏りを助け、先祖の佛に供養をし、無縁の佛や墓を世に出し回向する等、非常に効果多き自分の壽命引延ばしの術であります。それから物の命を助ける事も努めてしなければなりません。是等の行ひが何故に壽命引延ばしの轉因であるかと云へば、物を殖やし育てるのは大神靈の働きでありますから、此の働きに順應するから、自分の壽命をも引延ばし増殖するのであります。又老後はますます肉食を少くし、且つ灸を怠つてはいけません。三里もよし、背中もよし、兎に角灸は長壽の秘法であります。

## 六、生活の安定

(イ) 倒産は奢侈と利息から

人が生活に困ると云ふのは、多く後天的因縁でありまして、所謂心がけが悪いと云ふ事實が多いので、一家を支持するには、一定の収入がなければならぬ。常に其の収入を減らさぬやう、少しでも殖やして行くやうに心がけるのは自然の方則であります。又支出の方はいつでも収入より少いやうにする事を忘れてはなりません。こんな事は誰でも知つて知りぬいて居る事ではありますが、そこが因縁で其の極り切つたことが行へぬのである。來月の収入を當て込んで今月の中に費消する、或は又餘儀ない事情から借金を拵らへた場合でも、毎月利息と云ふ餘計なものを支拂はねばならぬ、終には利に利がついてドン／＼収入が減せられて行くやうになる。生活に困ると云ふのは働く仕事が無いとか、失職したとかいふ場合は極めて少なく、其多くは収入を無視した奢侈とか、負債の爲めである、世の倒産を見るに、單純な不景氣や災難のみでは無い、其の多くは、奢侈、無謀な思惑違ひ、負債の利息、皆之れであります。生活の安定を缺く大原因は、必ず奢侈と利息であります。然し此に氣がついて、急に改めやう



とせば、奢侈は其日からでも改め得るが、利息の出るのはこちらで改める氣でも、向ふが承知しないから、問題は六ヶ敷い、生活費をウンと切り詰めて月賦なり年賦なりで消却の出来るものならば、其時其場から實行に移るが宜しい、若し生活費を切り詰めても、尙返済の道が立たぬ有様であるならば、其は其の上彌縫して行く事は、所謂無理押しになります。此無理押しを繼續すれば、今度は物質上の問題は離れて因縁を醸成して行きます。其の行詰りは身投首經り心中夜逃げと、因縁の極刑を受けねばなりません。

#### (ロ) 家運挽回は一刀兩斷のみ

之を救済復活するには一刀兩斷の處置が、一刻も早く行はれるのが轉因の妙所であります、一寸試めし五分試して壽を引き延すのは双方の苦痛はいよ／＼大なりでありますから、此の場合は匪を閉ぢて一思ひに斷行する、そして快復後對手の損害を賠償すれば宜しい。負債の多く出来る家は、必ず収入の多いものであります。収入が多い

から安心して負債を拵しらへる。是等が一種の無形の因縁法則で、負債を切り捨てるどガツクリ収入が減るものであります。負債のある當時の如き収入があれば、利息さへ打切れば元金はドシ／＼減つて行くべき筈であります、さうは行かぬもので、負債の整理をすれば必ず収入が少くなる、それだから餘程熱心に収入を計り、支出を減じて行くやうに心がけねば、第二回の整理、第三回の打切りと連続せねばならぬやうになります。

そこで此の生活に困らぬやうにするには、第一に家内諸道具の整頓、神佛を綺麗に掃除して祀る事、臺所及便所を綺麗にする事、家内の秩序を亂さぬ事即ち長幼の序を立て、苟くも卑者が尊者を侵すやうな事のない事、召使ひを感み愛する事等で、其他の心得は病氣や長壽の法と同じです。

#### 七、社會的事蹟を遺せ



此の社會的事蹟を遺すと云ふ事は、功名心や賣名主義に流れてはいけません。此の仕事は全く物質的損益計算を離れた轉因術の極意の部に屬するが故に、此方面に力を注げばいよ／＼幸福を將來し得るのであります。なぜ社會に對し功勞の必要があるかと云へば、人格とか、名譽とか、四角ばつた意味は兎も角、吾々が生れて以來、何から何まで一切合切社會から恩を受けて居ります、いはゞ赤兒時代から一人前になるまでに浮世から借りが出來て居る次第であるから、之を返さねばならぬ。此の借りは更めて催促は無いけれども、返さずに放つて置けば、必ず因縁の制裁を受けねばなりません。その報ひが恐ろしいから、佛教では衆生の恩と云つて八釜敷教へてあります。此の點から社會的の仕事なら何でも宜しい、福運の種蒔と思つて出來るだけ勤めねばなりません。勿論社會的でなくても、人を助ける仕事や行動でも結構であります。此の行ひは悉く自分の將來は言ふ迄もなく、子孫の世まで善縁を引き善果を齎らすので、決して忽には出來ません。

## 八、家庭を樂土にせよ

(イ) 家庭の基礎は夫婦

悪い夫を持ち、悪い妻を持つたのでは、良い家庭ではありません。家庭の良否は人間一生の運不運の岐れ目であります。夫婦の結合は家庭組織の根本であつて、若し之を過つたのでは終生の不作でありますから、最初が大切である。乃で夫婦の縁組は双方共に後日悔のないやうに、充分に其對手方の品行や性質を撰び、其の家庭の因果關係や、其の兩親の性質の行動等に注意せなければなりません。何れにしても男女共整頓性を備へて居ないものは、決して感心したものではない。特に注意を要する事は、嫁を貰ふに際し其の嫁となるべき人の母親が長幼の序を行持し得ないやうな人であつては、其の娘は必ず面白くないが多い、即ち夫を夫として取扱はぬ婦人の娘は多く遺傳的に其經路を辿つて居ります。



(ロ) 家庭組織と秩序

三八

言ふ迄もなく家庭は、最も平和の樂土であらねばなりません。けれども其の中に言ふに言はれぬ凜とした所がなくてはならぬ。それは家庭内の秩序であります。河合氏の日本家庭訓第三十五則に曰く、『主は一家の長なり、一家を一城とし、從類を味方として、生存競争の世に立つ、其の苦心想ふべし、從類は之が股肱腹心となりて従ふ、其情慇懃むべく、其の勞察すべし、されば主は、從を因縁ありて、己が手足の用を務むるは、可憐の者よと思ひて、深切一途に之を使ひ、從は、因縁ありて此の主を首領と戴くは、辱なき事よと思ひて、忠實一偏に之に事ふれば、主從の義理おのづから調ひて、其の情互に依頼する所あらむ、但し惡質にして化し難き者は、早く暇を取らせて、累を去るべし、是も亦義のある所なり。』とある。是れ眞に家庭の因果絶滅の法であります。今少しく之を解説すれば、『主は一家の長なり』とは、君臣の義の大なるものを、小割にして殺で行くと、一家の主從に及んで來ます。今こゝは一家に在つて

の君臣の義を明かすので、君臣主從共、義と云ふ典は一理であるから、主人は即ち一家の君位に立つて居る者であります。『一家を一城とし、從類を味方として』とは、主人を君位に立てると云ふと、其の家は即ち一國一城であつて、從類眷屬は、即ち主人の味方の兵卒であります。此の味方の兵卒を率ゐて、而して此の『生存競争の世に立つ』て居るのであります。が此の生存競争と云ふ事を、今の人は人間世界の眞理のやうに心得て居るが、決してさうでは無いのです。その故は、人には本心と迷心の二つの心があるから、此の二つの心で以て此の二つの世界を造つて居るのであります。之は實に厄介な事ではあるけれども、亦人類の免れぬ數である。そこで一應此に辨じて其の惑ひを拂つて置かねばなりません。本心とは何である乎、宇宙の眞理を、一身の中に固有して、本心と成つて居る所の、眞正の主人公の事でありませぬ。迷心とは何でありませうか。其の眞正の主人公あることを知らず、智情意の官能を認めて、一身の主人公として、之に主權を取らせて居る、是れが迷心であります。そこで迷心

三九



は形體の内に、みづから妄造する所の虚妄不實の人作物で、本心は形體の上になつて宇宙と其の體を同うする所の、眞實無妄の眞理であります。此の境界を知らぬ者を、佛法では顛倒の凡夫と云ひ、又本心の世界を人間界と云ひ、迷心の世界を修羅道とも云つてあります。先づ本心の世界からして、其眞理の在る所を云つて見やうならば、人生の眞理と云ふものは、推譲が持前で、子は親に譲り、親は子に譲り、夫婦兄弟他人の交際等總て互ひに、相譲つて行く間に、生存の道が開けて來るのであります。競争は丁度此の反對でありますから、本心が主權を取れば、總ての事が悉く推譲に成り立ち、迷心が主權を取れば總ての事が悉く競争に成り立つのであります。こちらで推譲を主として居ても、向ふから競争で侵して來た時には、止むことを得ず、推譲を一轉して競争もするのであります。何時でも向ふが平和に成つて來れば、本來の推譲に立ち還つて、和議を結ぶのが我が日本の軍立であります。國と國との交際にも、能く自國の道義を治め徳行を守つて、吞噬の野心などは萬里の外に打ち遣つて了

つて、總て他國の便宜を圖り向ふの益を成さしめる時は、又向ふからも其の通りに仕向けて來て、親睦も破らず利得も損せず、美しい交際の中に互ひに安心して、事が舉り業が運ぶ、之を本心の世界、即ち人間界と云ふて、誠にあきらかなものであります。さて私が今、かう云ふやうな事を言へば、人は今時そんな暢氣な世界があるもの乎と云ふかも知れませぬが、併し斯う云ふ世界になつたら善いか又悪いかと聞いたたら、何と答へませうか、されば人はさうなれば嘸美しいものだと云ふであります。是れ即ち文明の本旨であるから、誰に聞かせてもそれは悪いとはいふ筈はない。されども今此の狡點世界に只一人正直にして居たら、どうして今の世に生活して行かれるものかと危ぶむ人が、十人が十人、百人が百人まで皆さうでありますから、本心世界の話しは此の邊で中止して置き、さて其の裏面の迷心世界はどうでありますか、是れは總ての事が皆競争で成り立つので、上役を引き摺り下して、己れが取つて代らう、人を欺して損をさせて、己が儲けやう、何でも彼でも人を突き倒して、我れ一人得を



取らうとすると、向ふからも亦其の通りに巧んで遣つて来て、思ふやうに儲かるものではない、そこでお互ひに生存競争と成つて来るのであります。かう云ふわけで此の生存競争の四字は、博愛、公益、公德、忠實など、云ふ考へを持つて居ては、逆も出来る事では無い。然らばそれを半々にして、半分は博愛、公益を行ひ、半分は生存競争を遣らうかと云ふ人があるかも知れぬが、それは根本の理を二つにするもので、決して行はるゝ筈の物では無い、然るを其れや是れやの深い考へも無く、今時の人は生存競争と云へば非常に立派なものであるが如く、それを人間道の條理の如くに思つて居るのは世の風潮に目が晦んで了つて、眞實の世相が明かに見えぬからであります。其證據は天地は昔も今も其持前たる萬物を増さう殖さう、小割にすれば推讓の徳で成り立つて居るから、無心の植物世界などは今尚ほ大昔から引續き推讓の姿そのまゝであります。例へば人間は人に利益を與へる事は大嫌ひだと云ふに、大根や牛蒡にしても根も葉も全身を擧げて皆人の用に供し、身を粉碎して人體の滋養となり、全く己れ

は犠牲となりて推讓の理を果して居ります。それにも拘はらず、現今の風潮は物質的に趨りて、世界一ぱいに、競争くと騒ぎ立て、陰に陽に利と權を奪ひ合ふ有様となつて居りますので、家庭訓に、『生存競争の世に立つ』と書いてあるのは、此の迷心世界の迷心競争の世に立つと云ふたのと、同じ意味でありまして、其の實、世の眞理が競争の世に成り替つたのではありません。人間が競争の人間に成り下つたのであります。尤も競争と云ふ事は、學藝とか事業とか商賣とかに、其發達を促がす途中の機械に用ふるときは、物質界には中々功を奏する事もありますから、頭の進んだ人の中には之を大に利用するけれども、これは全く途中だけの必要にして、競争を以て人生の眞理とする事は、徹頭徹尾大間違ひであります。而かも斯の如く間違つた世に立つて、家庭を治め事業を廣め、眷族を扶持して行くは、中々容易な事ではない。實に『其苦心想ふべし』であります。さて眷族『從類は之が股肱腹心となりて從ふ』。股肱はもひちの事、腹心ははらむねの事で、是は我が身を忘れて、主人の身に成り切つて居



ることでありませぬ。かやうに主人と共に苦心して働いて呉れる者ゆゑに、『其情愍むべく』其情實に於て誠に愛愍すべく、『其勞察すべし』で、『されば主は従を因縁ありて己が手足の用を務むるは可憐のものよと思ひて』とは、主人が我儘や自分勝手に家長になつたのではありません。銀行や會社を造つて社長や頭取になつたのは、大に其の意味が異ひます。自分でも知らずの裡に一家を起して其主となり、それから妻を娶り、子孫が出来、眷族從類が集まり殖えて來るので、いつの間にか知らず／＼に一家の主と成つて了ふので、之れ一大家族中の勝れた過去の因縁の持主であるから主となるのであります。

(ハ) 因縁から成り立つた家庭

畏れ多いことながら、天皇にお成り遊ばす御方は、其國中で第一番の優秀なる御因縁によつて、御即位遊ばされるのでありますから、たゞ／＼不敬漢が現はれるやうな事があつても、天罰の因縁立ち所に至るのは當然で、七千萬の國民が、貴賤貧富賢愚

に各々其の因縁を姿に現はすのは、人力の如何とも爲し能はぬ所でありませぬ。釋尊は此邊の消息を悟らしめんが爲に因果經を説かれたので、境遇の貴賤や財産の多寡を見て以て、直ちに奢りたかぶり、又は悲觀煩悶するなどは、實に此の因縁の偉大なる力絶對に通れ得ぬ宇宙の大法則を知らぬが爲めでありませぬ。古歌に

山鳥のほろ／＼と鳴く聲きかば父かぞ思ひ母かぞ思ふ

と詠んでありますのは、此の因縁の恐るべきを注意せられた歌であります。私共が此の世に現はれたのは、因縁によつて現はれ、因縁を果たし且つ因縁を更に造りに出て居るのでありますから、お互ひに餘程氣を注げませんと、前の因縁を果たし切らぬうちに、あとから／＼と新因縁を造つて行きます。であるから此の世を不運不愉快に送つて、なほ其上次の世まで悪い業をのこして行くやうな、淺ましい事になります。かう云ふわけで、主人に生れるのも、妻に生れるのも、子に生れるのも、兄に生れるのも、妹に生れるのも、これ皆過去の約束で、何等不平不満のあるべき筈がありま



せん、今日の主人が明日は人の召使になるのも、今日の妾が明日は正妻になるのも、今日の人の召使ひが明日は一家の主人になるのも、悉く過去因縁の現はれで、其妾が變化して行くのでありますから、其境遇の變る度び毎に心を迷はせては成りません。

(二) 最も有功にして最も危険なる女性

家庭の圓滿を計るには、第一の有功者は女性であります。そして其反對に、家庭を破壊せしむるものも亦女性が與つて力ありと言はねばなりません。そこで家庭の福運を双肩に擔つて居る、近頃の女性は、大分に權幕が強くなつて、妾は夫に養つて貰ふのでは無い、妾は妾だけの勤めをして居るから同權だ、別段一目措いて夫に服従する義務がない、と云ふやうな新しい思想が漂つて居ります。誠に御尤もな理窟ではありますけれども、前に述べた通り一家は一城と同じで、收入の多寡や貴賤貧富によつて人倫が左右せられ因縁に伸縮のあるべきものではありません。一國の城も、九尺二間棟割長屋でも、主は主であります、妻は妻であります、子は子であります。それな佛

教の所謂差別即平等であります。

(ホ) 月にむら雲花に風

此に諸君の御參考に、秘事を一つ申述べませう。眞理は、月にむら雲、花に風、であります、百草の中には藥草と毒草があります。人に本心があるから、迷心がありません、釋迦があつたから、提婆がありました。世に利巧がありますから馬鹿があり、金持ちがあるから貧乏があります。此の故に日々身投げ心中首經り、強盜強姦姦通等數限りなく新聞に載つて居ります。であるから眞面目な人を月とせば、彼等は皆むら雲であります。どうでもかうでも浮世には此の叢雲が無いわけには行きません。其のむら雲に成つて呉れる人は吾々の身替りに立つて呉れる人で、決して憎むべきでなく、却つて同情感謝の念を以て迎ふべきであります。石川五右衛門が、

石川や濱の眞砂はつきるとも世にぬす人の種はつきまじ

とは大眞理の絶叫であります。貧乏人がなければ金持ちは出来ません。金持ちは貧乏人



が恩人であらねばなりません。智者は愚者が恩人、勸業債券で一等の當つた人は、澤山の外れた人が皆恩人であります。外れる人がなければ當る事は出来ません。今一つ言つて置き度い事は、此の娑婆世界は凡て假相であるの一事であります。と云つて種も無い物ではなく、丁度日本銀行で發行する兌換紙幣のやうなものでありまして、大元には正貨と云ふ眞實の黄金が備へてあつて、假の相の紙幣となつて現はれて居るのであります。世の人は世の寶として毎日紙幣を大切に取扱つて居りますけれども、紙幣には何の價値もないので、其の蔭に在る眞實の黄金に値打があることを忘れて居ります。若し蔭に眞實の黄金がなかつたならば、紙幣その物は一貫目五錢か八錢の紙屑に等しいものであります。であるから此の浮世はさながら日本銀行の兌換券の如き假相のもので、又譬ば芝居の舞臺のやうなもので、殿様になるのも、お姫様になるのも奴になるのも、人に斬られる役も、人を斬る役目も、皆假相であります、只芝居の方は時々幕があるが、此の浮世は永世幕なしであるところが異つて居ります。であるか

ら、殿様を羨やんで奴が衣裳を脱いで暴れ出しては、芝居にならない、千兩役者は奴でも、腰元でも何の不平も無く上手に勤め上げるから、ヤンヤと褒められる。此の道理が判つて見れば奴に生れても、貧乏人に生れても、假の相ちやと悟れば面白く一生が勤まるわけではありませんか。

(一) 家庭に大事を芝居ごころ

一家眷族主従共、此の芝居心で自分々の役目を大切に勤め上げれば、一家擧て開運し、悪い因縁はだんく薄らぎ、美事に過去の因縁を轉じ得るのであります。尙一つ注意すべきは、一家の中に不良な、芝居心のない者があれば、それは涙を揮つて打切らねばなりません。それから滅多に無いことながら、夫の妾狂ひは改めれば元に戻り、妻の姦通は絶對に元に戻りませぬ。姦通と同時に心理状態が變化して、決して元の心に戻らぬ事は萬人が萬人皆さうでありますから、之は特に注意を要します。夫は妻を愛するの餘り、子供まである仲だから心さへ改めて呉れれば、元通り



にと希望するものが常であります。然れども哀しい哉此の時を以て其の家庭は破壊されたので、永遠に家庭は暗雲漲ざり、收拾すべからざる悲運に陥ります。一度此の不祥事があつたら、涙を揮つて一刀兩斷が双方の開運であります。温い家庭は因縁を薄らぎ、終に福徳圓滿となり、冷やかな刺げくした家庭は因縁はますます濃厚となり悲運のどん底となり終るのでありますから、此の目的を達するに妨げあるものは英斷の一途によらねばならぬ事を特に述べて置きます。

## 九、子供の出来る轉因法

(イ) 親の恩と子の恩

子供を澤山持つて苦勞して居る人から、子供の無い夫婦暮しの人を見ますと、如何にも整頓した綺麗な生活が出来て、そして生活費もかゝらないから、暮し向きも豊富で、身装も小綺麗に、植木いぢりや、小猫や犬を飼つて楽しさうに見えます。一

方は小さい子供を澤山育てる苦勞は容易なものではありません。母親は頭の髪さへおちく／＼櫛つて居るひまがない、夏になれば蚊や蚤に喰はせぬやう夜の夜中まで、寝るにも寝られぬ一種の苦役にでも服して居るやうな状態であります。そこで子供等が皆、やつと馬にも牛にも踏まれぬやうになつて、まづ／＼安心と云ふ頃は、親の頭には白髪が生えて居ります。両親は子供の爲めに若い盛りを全部犠牲にしてつたのであります。若し母親や父親が直接子供の世話をすることを厭ひ、下女や子守に托して置くやうな家庭では、子供は不良性を帯びて其の多くは出来損ひます。また四五人も子供がおりますと、交る／＼頭が痛いとか、足を挫いたとか、腹が下つたとか熱が出たとか、それは／＼手敷と心配ばかり、あとから／＼と湧いて來ます。そして子供等は其の親の有難味を知つて居るかと思へば、それが自然のやうに心得て、他人に繪草紙一枚貰つた程にも感じて居りません。丁度吾々が毎日／＼世界隈なく輝して下さる日光の御恩を、忘れて居るわけでも無いが、日を見る毎に感謝しても居りませ



ぬやうに、大自然の大自然に慣れて了つて居るのであります。親の方では此苦勞難儀をしても、他の事とする苦勞難儀ほどには、辛いとも哀しいとも思ひはしませぬ。しかし太陽が三日も現はれず、水が一日でも切れて了つたら、それこそ大變三十年五十年の間思ひもせなかつた、日の恩水の恩などが、一度に思ひ浮べて沁み／＼と其有り難さが解ります。それと同じに親の死んだあとで、親の洪大な恩、親の有難いことごとくが一時に別ります。『孝行の仕度い時分に親はなし』今更ら石に蒲團も着せられず』などは、親の死んだあとの後悔の情が現はれて居ります。凡そ此の世中に自分に對しては親ほど有難いものは決してありません。讀者中で親のある人々は、極力大切に上げて下さい、世の親達は子供から、金錢物品を貰ふことを望むのではありません。親に對する子供の優しい態度、親を慰はる情けある心、子供の身の上についての安心、此の三つさへ調へて居れば二十年三十年の子供の爲めの苦勞は綺麗に消えて了ひます。

されば子供と云ふものは、それ程厄介なものかと云へば、決してさうではありません。親の身にとつては世に子供ほど慰安を與へるものはありません。終日の勞働に疲れ切つた身體を引ずるやうに月を踏んで歸つて来て、ぞろつと並んで寝て居る子供の寝顔を一目見ますると。そのよい嬉しい心持だけで、もう疲れは忘れて了ひます。今日は人より餘計に働いて餘計の金を儲け、何か子供の好きなものを買つて歸つて喜ばせやう、腹が空いたから途中で一杯飲まうか、イヤ／＼それより子供に何か甘いものでも、と云つたやうな氣持ちで働くのも、辛い辛抱も案外樂に出來ます。又如何に悲運に貧乏をして居ても、子供さへ大きくなれば、と樂しみを未來に置きまして、現在の辛さ哀しさなどは、ごんやにでも我慢が出來ます。其の樂しみあるが故に未來の不安と云ふものがあります。であるから現在の苦痛を容易に忍び得る事や未來の囑望と安心とに就ては、親も亦子の恩に感するのであります。

世の諺に「親馬鹿」と云ひますが、眞に親は子の爲めに、一種の馬鹿になる事が往



々あります。或る田舎に私の知己某の息子が十七歳の時、東京へ奉公に出ました、そ

五四

して丁度一年目の秋の頃、始めて宿下りで田舎へ歸つて参ります時、其の前に汽車の着く時間を知らせて来たものですから、其父親は汽車の着く時間になると柿の木に登つて切りに驛の方から来る道を睨んで居りました。家族の人々は「お父さんは何をして居るのでせう」と噂して居る。此のお父さんは其の當時彼是れ五十歳の人で、而も相當に教育もある人であるにも拘はらず、子の愛にかけては此のやうなもので、息子の姿が見えると驚いて木から下りて、座敷に泰然と坐つて居る所などは、慥かに「親馬鹿」の資格を持つて居られたのでありませう。戀愛から起る愛情は非常に熱烈で、一命を捨てることさへ厭ひませぬ。けれども此の種の愛は、佛教の所謂無所得ではありませぬ。自分だけ死して對手方の出世を祈るなど、云ふのは極めて鮮い。時に或は「どうぞ貴郎はよい奥様を迎へて幸福の生涯を送つて下さい私は草葉のかげから祈つて居ります」など、美事な遺書を殘して死ぬ女性もあるけれども、之は失戀の自殺で

對手を呪ひながら、やけくそで外見を街つて死ぬに過ぎないので。つまり世渡り上手の自殺とでも云ひませうか。之に反して、親子の間柄は、そんなに無暗に天國に上るほど熱烈ではないが、愛情がもつとく／＼眞面目です。親子の間に於ける愛情は一切無所得でありますから、之を眞情と云ふのであります。

(ロ) 授かる焼餅子

親子夫婦は五倫五常の基礎でありまして、容易ならぬ因縁であります。此の重大な倫を缺いて居るのは、無子の人であります。大神靈の働きとして、増さう殖さうの法則にも缺ける事になります。自分等夫婦は天の恵みを享け、父母の恩を受け、そして成長した恩返しには、子供が多くて困つて居る人の子供を引受けて育てるか、又はよるべなき感れな子供を引受けて養ふか、何れかの途を講せねばなりません。それは無論無所得でなくては成りません。養子や貰ひ子の失敗は、其多くが有所得觀念からであります。そして人間は無論一切の生き物に對して、最も温い心を持ちて接する事



に勤めますると、科學で認め得ない神秘がありましたして、子供が生れるやうな運命を來たします。世に所謂やきもち子と云ふのが、之に當るのであります。此の焼餅子と云ふのは、子の無い人が子供を貰ふと、懷妊するのであります。之は決して嫉妬を焼いて出来るものではありません。無所得觀念で他人の子を貰ひ受けて育てるが故に、無子の因縁變化して、立ち所に懷妊するのであります。こんな話を科學萬能者に話せば、一笑に附して了ふけれども、此の神秘なる現象は科學の知る所ではありません。之に關する生きた證據を轉因講義で述べます。さて無所得とは何等報酬觀念のない心であります。我が子に物を與へるやうに、池の鯉に餌をやるやうに、之れでも子供を喜ばせやう、鯉の餌を喰べるさまを見やうなど、幾分の有所得觀念が潜んで居りますけれども、之は極めて薄いから仕方がないとしても、人の子供を養ふに有所得觀念があつては、効果はありません。

### 十、財産増殖の手段

凡そ此の世に我が物とするものは、自分の靈魂ばかりで、其他身體を首めとし、所有の財産一切悉く我がものではありません。自分が勝手に我が物と定めて、勝手に執着して居るのみである。吾々の記憶の鏡に映つて居るから、且らく我が物と感じて居るのであります。財産より一層大切な吾々の身體が若し我がものごせば、少くも百年位は寺へやらぬがよろしい、所が因縁來れば明日とも云はず即今只今直ぐにも引上げられる。此の身體ばかりは俺れが物ぢやと止める事も出来ません。其の有形財産などは或る場合には我もの所の段ではなく、敵の片割れのやうな事もあります。彼の大地震の時などは、我がものも人のものも有つたものではない、よく焼けて灰も残りません。其時始めて記憶の鏡に映つて居たもの其の影が消え去つたのであります。此の記憶の鏡に映つて居る影法師の爲めに人と争ひ、親子喧嘩や夫婦別れ、誠に淺ましい次第であります。然れども執着はしてならぬと同時に、天から因縁を以て預けられた財物、無駄に費消してはならぬ、ますます増さう殖さうの方則に従ひて、自然的合理



的に増殖させねばなりません。但し此の財産を増殖するには、其の凡てが合理的であらねばなりませぬ。収入と支出との釣合を嚴重に監視して、必ず幾分の餘裕あるやうに生活せなければなりません。之も前に述べた通り奢侈と利息は絶対に禁物、利息を取ることを考へるよりは利息を拂ふ勿れが原則であります。原則としては自分の懐にある一錢銅貨一個も我が物では無く、天からの預りものであります。決して自分自身に勝手に濫用してはなりません。又儲ける工夫よりは遣ふ金の工夫が大切であります。即ち一圓の金を殖す事を考へるよりは一錢の無駄費ひを省く事が大切で、つまり出費を削り／＼して居れば、自然に財産は殖えて行くのであります。唯此に注意すべきは義理人情を缺いでまで殖さうとするのは、眞理ではありません。人の弱味につけ入つて、無理な金品を得やうとするのは、前述の無理押しの原因が来て、安田翁のやうに全財産を而も肉體まで附けてお返しせねばなりません。財産に關する因縁は、其多くは後天的の部でありまして、丹精と心がけで必ず殖し得るものであります。なせ

ならば大神靈の法則は増さう殖さうでありますから、一粒の米でも倍の二粒となり、二粒が四粒となり、終には千粒萬粒と殖えて行くが如く、金銭も一圓が二圓になり、二圓が四圓となり、やがては千圓萬圓と殖えて行くのが自然の原則でありますから、之が殖えぬと云ふのは殖える力より消費させる力の方が強いから自然に反する逆數であります。之も無所得方針で、各自一家の生活の安定を固めるのみの欲にして、其れ以上は社會的に喜捨する考へが必要であります。元より喜捨ですから名を賣る考へではいけません、苟もそんな考へがあれば、如何に多くの喜捨をしても有所得に陥ります、有所得は必ず因縁を引きます。前述の人生の標準と云ふ事を忘れてはいけません。要するに人間は過去の善因善果を果たすが爲めに、假に此の世に相を現はして居ると云ふ事を深く考へねば、兎角物事が間違ひ易いのであります。

## 十一、老後の幸福と安心



人の老後の幸不幸は、其人一生の結論として最も興味のある事と思ひます。因縁の最も顯著なるものとせねばなりません。植物で言へば、二葉の間は風も嵐もあまりに痛痒を感せずして成長し、中年に於て花咲く頃は幾多の艱難辛苦に遇ひ、そして結實期に入るのでありまして、其の結實期こそ吾々の老後、此の世での因縁の總勘定の時であります。此の總勘定に餘裕を生ずるか、又不足を生ずるかは、實に其の人生の努力如何に在るのである。精神界物質界双方併行した合理的數理的の結晶で、其の場になつて如何にどたばたしても、もう間に合ひません。先づ世の有様を見渡しますると、殆んど一生の間、苦勞と辛苦と奮闘を續けて來た人でも、死の一二年前から急に安樂の境界に移り替り、極めて平安に死につく人があります。かう云ふ人は精神上に成功して、物質上に失敗した人であります。從來宗教家殊に佛教家の説き來つた所は、其の多くは精神上の事のみにして物質上の事に言及して居りませぬ。それが爲

めに多衆は全く誤解して、金錢物質は汚れたもの、不淨のものなぞ、思ひ詰め、妙に聖人菩薩を氣取つて、蓄財の準備もせず、未來のみを囑望して現在を顧みず。事毎に人に欺かれて損失のみを繰返して、終に生活安定の財産も造り得ず、不自由な一生を送つて居るなど、かう云ふ人が精神上には稍成功しても物質上には丸潰れであります。私の毎時説く通り此の世は精神界も大切なれば物質界も大切でありまして、丁度車の兩輪の如く、双方相俟たねば片輪であります。譬へば人を救ふにも心で思ふのみでは救へませぬ、それ相當に金錢なり道具なり食物なりが無くしては救へませぬ。如何に聖人君子でも食はずには居られません、食ふには其の財源がなくては叶はぬ。從來此の勘違ひ行違ひを生ぜしめた教導者を、つらく考へて見ますと、其の多くは世の物質上の落伍者の早替りであらうと思ひます。其の本人からして、物質に破れても精神に成功すればよいとの、半面の考へから勘違ひして、家康の所謂僧俗の混合を顧みる違が無いのでありませう。如何に僧侶や神主が清廉で人格者であらうとも、萬



民悉く僧侶神主に成つて了ふ事は出来ません。乃で僧俗の分を明かにせねばならぬ、僧は僧の職分として、精神界を表面に物質界を裏面に、俗は俗の職分として、物質界を表面に精神界を裏面に、何れも両方面共離れては成りません。唯其の表裏の相違のある所に外見が異なるのであります。神の力、佛の力と云ふも、世の迷信家の想像するやうに、彼の者は病氣で悩んで居るから可哀想だ助けてやらう、此の者は貧乏で困んで居るから可憐の者だ助けてやらう、と云ふやうな事はありません。汽車や電車は毎日朝から晩まで走つて居るが、其の線路附近に百年待つて居ても、汽車や電車が窓から手のやうな機械を出して、其の人を乗ては呉れません。「神は自ら助くるものを助く」で、自ら助からうと手段を施すもの、外は助けては下さらぬ。自ら行つた事に對しては、如何に微細の事でも必ず報ひがあります。之を因縁因果と云つて、此の因縁因果と云ふ語は絶対保證の言葉であります。

(ロ) 因縁推讓の妙味

それなら信心も糞もない、働いて金さへ儲ければそれで人事足れりと早合點する人もあらうが、それは又片輪者であります。轉んで泣いて居る子供を起して勞つてやるだけでも、其の徳に對する應報がめぐり来るから、精神界の妙味は忘れられぬ所でもあります。佛敎が三千年間傳はつて、ますく之を時代化せしめていよく盛り行くのは、是れ立派な證據ではありますまいか。今一つ因縁と云ふ妙味あるお話をしてみれば、甲乙二人で魚釣りに出かけます、甲と乙と同じ道具で同じ餌をつけて、同時に水の中に垂れる。それで同じ時間に甲は十尾釣る、乙は五尾釣り上げる、それは乙には五尾だけの因縁、甲には十尾だけの因縁がめぐつて来るのであります。魚は幾世かの前生で其の甲乙の人の肉を食んだ因縁を果しに来るので、甲は乙より餘計に其の魚に前生に食まれて居たのであります。此の甲乙兩人が若し釣をせぬ時は、それが所謂推讓でありまして、徳を讓るのであります。修養の妙味はこんな所にあるので、其の魚が其の人の推讓によつて命が助かると。又生を替へ世を替へて其の人に犠牲を拂ひに



來る。太公望は此の理を悟つてか否かは知りませんが、眞つ直ぐの釣鉤で三年間釣をしたと云ひます。眞つ直ぐな釣鉤で釣つて居ては三年は愚か百年釣つても餌の施しで雜魚一尾釣れる筈はない、之れ大なる推譲であります。それかあらぬか終に城を釣り上げたと云ひます。此の邊の消息を物語つた面白い話ではありませんか。かう云ふ工合に毎日吾に接する事は、善にもあれ惡にもあれ、あらゆる物質界の事は皆互ひに因縁の果たし合ひであることを悟らねばなりません。それと同時に此の世は亦因縁の造り合ひであることを知らねばなりません。それであるから一事を行ひ一言を發するにも、悉く大神靈の御作用に背かぬやう。微細の點まで心を注がねばならぬのであります。此の心がけを以て世を送つて居れば老後の安泰は確實に保證のできる次第であります。

## 十二、向上再生の準備

吾々が死んだあとはどうなるか、と云ふことは皆一樣に疑問でありますけれども、之は必ず再生すると考へねばなりません。佛教では生有、死有、中有と云ふことを説いてあります。これは吾々が此の世に生れて來て、一期の壽命を持つ期間を生有と謂ひ、死の因縁來つて一息截斷此の世の壽命盡きた時を死有と謂ひ、それから、今生から次の生を受ける迄の間を中有と謂ふのであります。さて其の中有と云ふのは、どの位の年數かと云へば、極めて短いもので極惡極善の因縁を積んだ人は死と同時に再生する、然らざる人は七日間の中有を命せられる、そして七日間で再生の縁の來たらぬ時は更に七日間の中有を受ける。それでも尙ほ因縁來たらぬ時は、又更に七日間の中有を受ける。それでも尙再生の縁を感せぬ時は又々更に七日間の中有を受けるので、如何に長い中有でも七日間宛七回の中有の中には必ず再生すると云つてあります。それであるから、人が死ねば七日目に初七日と稱し、十四日目は二た七日と稱し、七七四十九日で家の棟を離れると云つて、其の都度供養をします。けれども實際は四十九



日を待たずして、家の棟を離れて居るのであります。時に或は幾百年も中有に迷ふて居る例外もあるさうです。かうなると少しく佛敎的のお話になりますが、吾々の日頃積んだ記憶の固りによつて次の生が定まるのでありますから、心に悪いと思ふ事は一切せぬ事、善いと思ふ事はドシ／＼積んで行く事であります。さうすれば諸君の再生が果して向上か、或は向下かは、自らお解りでありませう。こんな問題は爾く簡單では説明は出来ませんから、追て轉因講義で述べます。

### 十三、子孫に譲る幸福

人には智慧と云ふものがありまして、あるに任せて勝手氣儘に利用しますから。知らず識らず悪用に傾き、因縁因果を積む事が多いのであります。殊に宇宙の眞理を悟り、思ふがまゝに徳を引寄せた、所謂居士と稱する在家の修道者の子孫は多く天死、低能者で、子孫の繁榮と云ふ事が鮮い。私は之を一種の天刑と言ひ度いのであります。

私がかんな事を言ひますと、彼は氣でも狂つたか、眞理を悟つた人が天刑を受けるとは何事ぞ、と云ふ疑問が起るであります。之に向つて私はいかうお答へをします。眞理は月にむら雲、花に風であります、所が所謂在家の智識なる人々は智に乗じて此のむら雲や風を拂ひ退けて、月と花を弄び推譲乏しく自分の徳を奪つたから、片輪に墮ちたとも言ひ得ます、凡俗でもあまり利巧で才が有り過ぎて、そして注意周到一點の抜け目の無い人は、其の多くは子供がはづれて居て、却て親のだらしの無い人の子が當つて居ります。此の有様を見ても、如何に因縁は複雑して居ても毛節一本曲ひの無い生きた證據ではありますまいか。例へば一家の内でも父親は條理整然横から見ても縦から見ても立派な理性を持つた人であつても、口八ヶ益しい感情一片のやうな母親でも其れの無い家庭からは不良兒が出ます。餘り子供の教育に價値の無いやうに見える感情に走つた口八ヶ益しい母親でも、其の暖かみは又格別の妙味を具へて居るからであります。かう云ふ工合に此の世は道理一片では成り立ちませんから、如



六八  
何に修道の妙を知り、眞理を悟つても、俗は俗として俗の行動を俗と共に繰返す底の行ひをせねば、彼の天刑の居士に墮ちるのであります。俗はどこまでも俗、如何に廻りくごくも俗を離れぬやうにすれば、子孫の繁榮と幸福を贏ち得ることが出来ます。

### 十四、一代の運命循環時期

之は藤川氏秘藏の運命循環時期表であります。因縁轉換の參考にもなれかしと、此に掲げて置きます。但し二月の節分より前に生れた人は年齢を一つ多くして見るのです。

- 一才 十才 十九才 廿八才 卅七才 四十六才 五十五才 六十四才 七十三才 八十二才

潜運 ● 羅喉星 此の年に當る人は蚊龍地中に潜むの象にして天にも昇るほどの勢ひはあるけれども、未だ運勢が潜んで居る時であるから、何事も蹉跌が多く、手違ひ

損失病難等有り勝ち故氣を付けねばなりません、又家庭には口舌事多く、新事業、移轉旅行、普請造作婚姻等も見合せて身を慎み安全を計るやうせねばならぬ。

- 二才 十一才 廿才 廿九才 卅八才 四十七才 五十六才 六十五才 七十四才 八十三才

開運 ● 土曜星 此の年に當る人は百花漸く研を競ふの象にして今迄潜んで居た運勢が、丁度春風に當つて百花綻び初むる様に、段々と運勢も開けて来るから、上半年より下半年の方が萬事好都合に運ぶやうになる故、其心持ちで萬事に準備を調へ努力するときは成功の途に就くことが出来るのである。

- 三才 十二才 廿一才 卅才 卅九才 四十八才 五十七才 六十六才 七十五才 八十四才

喜運 ● 水曜星 此の年に當る人は錦を着て寶を得ると云ふやうに、誠によい運勢の時、貴人目上の引上を受け業務も亦意外の利潤を得ることがある故、新規な事を



七〇  
始むるもよし又身を動かすことも宜しいが、然し浮々と一年を送り暮すやうな、落ち付きのない不真面目な事に日を送る傾きがあるから、充分身を慎しみ勵めば喜びを求める事が出来るのである、尙色情事や口舌事は心せねばならぬ。

四才 十三才 廿二才 卅一才 四十才 四十九才 五十八才 六十七才 七十六才 八十五才

生運 ①金曜生 此の年に當る人は月光雲間を漏る、の象と云ふて兎角よい運勢も折々黒雲のために覆はれて、清き月の光も隠る、如く、何に敷と障りがあつて六ヶ敷年である、然し其障りさへとれば元來よい運勢の時であるから、萬事に氣を付けて何事も謙遜にして進めば利益を得られるやうになる、殊に人世話、金錢貸借、口舌喧嘩等は充分注意をせねばならぬ。

五才 十四才 廿三才 卅二才 四十一才 五十才 五十九才 六十八才 七十七才 八十六才

盛運 ①日曜星 此の年に當る人は鸞鳳一時に至るの象と云ふて、至つて運勢の盛なる時である故、何事も吉ではあるが、新規に始むることや、投機的の事は細心の注意を缺ぐと意外の損失を招くおそれある故氣を付けねばならぬ、尙冬の三月は殊に萬事手堅くなさねば、後日に至り後悔する様なことが生じて来る、要するに此の年は龍頭駄尾に終らぬやうに始めより注意深くすることを忘れてはならぬ。

六才 十五才 廿四才 卅三才 四十二才 五十一才 六十才 六十九才 七十八才 八十七才

休運 ①火曜星 此の年に當る人は山中の寒寺に宿を求めの象と云ふて、旅人が山道に差しか、り疲勞して山寺に宿泊すると云ふ有様であるから、決して悪い運勢ではないのである、然し進むにも退くにも堅忍不拔の勇を出さねば、疲勞して居る身は中々容易でないから、勇氣を振り起して時期の回復を計るやうにすれば、必ず成功し得るのである、こんな時期である故移轉とか旅行等は成るだけ避けるが安全で



ある、又病難を注意し殊に持病等ある者は一層心せねばならぬ。 七二

七才 十六才 廿五才 卅四才 四十三才 五十二才 六十一才 七十才 七十九才 八十八才

死運 ●計都星 此の年に當る人は雪中の梅春を待つ象と云ふて、梅花は開かんとするも雪が深く積りて咲き出づる事が出来ないやうに、心のみ勞するから何に彼と氣迷がでて、諸事思ふに任せぬ事が多い、それで遂ひ山氣を出し又人の爲めに欺かれて損失をなすとか、近親か或は親しき人に別かれるやうな事がある、殊に自分の病災は元より家内の病難等に充分留意せねばならぬ。

八才 十七才 廿六才 卅五才 四十四才 五十三才 六十二才 七十一才 八十才 八十九才

進運 ●月曜星 此の年に當る人は猛虎千里を馳るの象と云ふて、誠に盛大な運勢である、されば新事業は勿論其他何事も決行して差支ないのであるが、諺にも過ぎた

るは及ぼざるが如しで、餘りやり過ぎると反つて失敗の種を蒔くことになるから、こう云ふ年は一層注意深く、宜しく目上の人の意見に従ひ萬事輕舉を慎しむときは人より羨まれる様な成功をする事が出来る。

九才 十八才 廿七才 卅六才 四十五才 五十四才 六十三才 七十二才 八十才 九十才

吉運 ○木曜星 此の年に當る人は津に至りて小舟を得るの象と云ふて、川に行くこと丁度折りよく渡し舟があるやうに、諸事都合に運ぶ時故何事にも差支へないが、しかし新規に始める事業等は餘程注意して爲さぬと、豫期せぬ障りが起るから、自分一己の了簡でなさに目上の者の意見を求め、性急にせず徐々に進む方針で行けば必ず成功する事が出来る。



轉 因 修 養 (附錄)

(イ) 伸 び る の 道

昔から忍耐の大切なることは誰れでも知つて居ります、知つては居るが時々忍耐を自ら破つて了ふ、夫れが爲めに、他を害し自己を損ね双方の不利を醸するのであります。憤怒は忍耐の缺乏から起ると云ふことは知つて居る、私なども時々此の忍耐と云ふ身の守本尊をお留守にして、後に後悔することが間々あるのは、誠にお恥しい話であります。

尺蠖は伸びる前には必ず屈するのであります、屈することがあつて然る後伸びることが出来るが、若し尺蠖が屈することを知らなかつたならば、伸びることも又出来ません、人も亦其の通りで、大に伸びんとすれば、大に屈せねばなりません、理由のない侮辱や小人輩の嘲罵を受けても、よく忍んで容易に怒らないといふ雅量即ち忍耐

の力があつて初めて他日の大成功が得られるのであります、些々たることに腹を立て我身を忘れて人と物争ひをする様なことでは、決して大成功を贏ち得ることは出来ません、必ずや碌々な間に一生を終らねばなりません、大人は大事に怒り、小人は小事に怒るとか言ひまして、チョツとした事にも憤々怒り散らして居る様では、成功を得やう道理がありません。

古の大人物は皆よく屈することを知つて居りました、彼の有名な蘇東坡の留侯論の中に。

匹夫、辱めらるれば劍を抜いて立ち、身を挺して戦ふ。これ勇となすに足らざるなり。天下に大勇なるものあり、率然として之に臨んで驚かず、故なくして之に加へて怒らず、これ、その挾持する所の者、甚だ大にしてその志、甚だ遠ければなり。

と、抑もこの留侯を何人なりと云ふに、姓は張、名は良、元韓の臣であつた所から



韓が亡びると、爲めに仇を報せんものと、力士をして、秦の始皇を博勞沙に要撃せしめ、そのこと成らずして、却つて追捕を受け、危く一命をまぬがれ得た人でありませぬ。この際留候には屈すると云ふことがなかつて、若し此の行爲を續けて行つたならば、彼は單に痛快なる一刺客を以て終つたに相違ありませぬ。然るに彼は、後日大に修養の功を積んで、屈することを學びました、博勞沙の一撃は、彼が修養前に於ける匹夫の勇を示し、圯上のごときは、修養後に於ける大勇を傳へたものであります。彼は或時下邳と云ふ所の圯上、即ち土橋の上で一老人に逢ひました、その老人は履を橋の下に落して、「小僧履を取つて来い」と云ふたのです、彼は素直に履を拾つて来て老人に進めました、老人は夫れを足の上でうけて、「この小僧、俺の教を受けるに足る奴ぢや、五日経つてから此處へ来い、此處で逢ふぞ」と約して置いて、その儘何れかへ立去りました、彼は約束の如くその日時に其橋の所に參りましたが、老人は既にチヤンと来て居て、「長者と約束して、後れるとは何事ぢや、五日経つたら来い、今日

は駄目ぢや」と叱りつけ何も語らずに又立ち去つて了ひました、其後五日を経て參りますと、矢張り老人が先きに來て待つて居る、今度も老人は大立腹し、俺より後から來るやうでは駄目ぢや、五日後に來いと又去つて了ひました。二度の失敗に懲りた彼は、夜半に出かけて行つて待つて居ました、今度は老人が間もなく姿を現はして、「オウ今日は早かつた、それでは教へてやらう」と云つて、一編の書を授け「是を讀めば、帝者の師となること出来る、他日濟北の穀城山の下で、黄ろい石を見たらば、即ち俺ぢやと思へ」とのみ、名も告げず、所も語らず、煙りの如く去つてしまひました。彼は不思議に思ひ乍ら。家へ歸つて夜が明けてから、その書を見ますと、それは太公望の兵法、有名なる六韜三略であつたのです、彼は非常に喜んで日夜それを讀み、終には西漢の高祖帝に仕へ、帝を扶けて天下を平定し、功を以て留に封せられました、後に穀城を通ると果して、黄色の石がありましたので、採つて奉祀したといふことであります。



彼が屈したから老人の教へは受けられたのであります、若し彼に此の忍耐がなかつたならば、恐らく太公望の秘略を黄石公から授かる事は出来なかつたでありませう。能く帝者を扶けて其師となり、天下平定の功をあげるに就ても、よく忍び能く屈したといふことが一大原因であつたに相違ない、こゝに於てか古人の訓めたる和歌があります。

たゞ忍べ人たる道の忍び草、忍ぶの外に道はあらめや

怒るものは内空しと云ひ、河豚に腸すくなきが如しとも云ひます、寺に勝ぎたる太鼓はよく鳴りわめくものであります、鬪雀は人を怕すで、一朝の怒りの爲めに身を忘るゝは、是れ小丈夫の所爲にして、世に馬鹿者と嘲らるゝのみであります、盗跖が孔子を罵つても孔子の聖たるには少しも傷はつきませぬ、藏倉が孟子を誚りましても、孟子の賢なる所は誰も疑ふ餘地のあるものではありませぬ。

自分が是であつて、他人の非を知るならば決して争ふ必要はない、若し彼が是にし

て我の非なるを知つたならば、負けて過ちを改むるより外に道はありませぬ、柳の枝に雪折れなく、いとも鋭き刃は缺けることがあります、堪忍五兩とは昔の言葉であります、今日の堪忍は何千圓、何萬圓の価値があるのでありませう、憤怒の勢ひを得たときは、丹田（臍の下）に力を籠めて一から百迄十度以上數へることがよろしい、斯くして心を落ちつけるときは一旦の怒りも霧散して、其處に本心が現はれて来る、本心が出現すれば、今怒るよりは忍ぶ事がどれだけ利益が多いかと云ふことも判然として來ます、張公藝が九世の同居も忍の一字を守るに在つたのです、愛妻が嘲らうが、朋友が甲斐性なしと云はうが、忍びこらへたものが最後の勝利を得ることは、時の古今洋の東西を問はず、永久に明かな真理であつて、之に反するときには兄弟互に闘ぎ、世間に誚りを醸し、禍蕭牆の下より起るのです、道に志し敬神の大道を履まうとするお互は、自ら戒め、亦人をも警むることが必要であります。

俳優澤村宗十郎未だ曾て技藝の上達しない時分、鹽谷判官に扮したことがあります



た、されども其舉動尤も下手で師直と怒り争ふときに方り、漠然として怒髪天を衝くの意氣のない爲、市川海老藏、師直に扮して屢々其拙劣なることを云ひましたが、宗十郎は少しも聴き入れませんでした。或日其技を演ずるに當りました、見物人は満員でした、海老藏、烏帽子、素袍、扇を執つて師直に扮し、大喝して井戸の鮒だ、鮒だ鮒侍だアと其面上に濁唾を吐き掛けました、宗十郎の判官手で之を拭かうとしますと、本物の濁唾であつたので、宗十郎は本當に怒り、已れ海老藏憎き奴覺悟せよと、怒氣忽ち面に溢れて眼玉に血を迸らし、怒髪逆立つて凄じい勢ひでした、之を見た見物人は覺えず拍手喝采して満場雷の如き有様であつたのです、宗十郎始めて悟り演技終りて後、海老藏に厚く禮を述べて云ふのに、自分は芝居を忘れて本當に腹立ち、全く眞劍に切つて了はうとしたのであつた、茲に於て観客は情に迫つて拍手してくれましたので、私は判官の立腹の意氣を呑み込んだのであるが、夫れより更に私は貴殿に向つてお禮を云ひたいのは、此の立腹の爲に五萬三千石の家祿を失ひ、身は切腹家

來は離散、忠義に凝つた四十七人の武士に迄腹を切らせて鹽谷は、我等が永久に忍耐と云ふものを大切にせねばならぬと云ふことを沁みく悟りました、と云つたさうであります。

私共は常に小事に屈して大事を活かす工夫が尤も大切であります、之は修養の一大眼目でありまして、世が如何に變遷しましても異らない道の眞理であります。

(ロ) 報 恩 感 謝

むづかしい話しは抜きにして、茲に歡喜と感謝と云ふ事について少しく述べませう。

吾々は朝になると必ず眼が覺めます、若しそれが覺めなかつたらごうでせうか、それこそ大變死んでゐるのであります。朝、眼が覺めた時に私達は、先づ生きて居るのだと云ふ事の歡びを、心から感謝しなければなりません。次に眼が覺めると物が見えます、若しそれが見えなかつたらごうでせう、可哀想に盲目さんであります。眼が見



える時に私達は自分の眼が見えること云ふ事を、本當に有難く思ひ喜ばなければなりません。起きやうと思へば、體が起させませう、物を言はうと思へば物が言へませう、斯様に身體の動かせる事、物の言へる事、それらのすべてが實に喜ばしい事でありま

す。  
親の恩、國の恩、天地萬有の恩、背負ひ切れぬ程大きな恩を背負つてゐながら、身體は自由に動かす事が出来る、眼は見える、耳は聞える、物は言へる、實に有り難い事であります。世の中には身體の自由に動かせない人や、物が自由に云へない人が澤山あります。實に氣の毒な其等の人達です、然し其人達でも毎朝眼が覺めた時、其生きて居る事に、更に眼の見える時、其の眼の見える事を眞に心から歡び感謝し得る人であつたならば、どんなに幸福な方でありませう。

世には大きな家に住み、美味しい物を食べ、立派な着物を着てゐても、全く歡びの心を持ち得ない人達があります、そんな人程、世の中に哀れな氣の毒なものはありませせん。  
ん。それに反して、住居はどんなに小さくても食べるものは不充分でも、着物は如何に粗末でも、すべての物に歡びと感謝を感じ得る人程、世の中に幸福なものはありません。

それから日頃嬉しい事や楽しい事にも心から感謝してゐる人であつても、一朝悲しい事やつらい事に出遭つた時、すぐに世を呪ひ、人を怨む人があります、それは本當に歡喜に満ちた人とは申せません、其つらい事や悲しい事の中にも靜かに考へてみますと、又感謝すべき事が必ずあるものであります、其時、其の感謝すべき事に向つて心からの喜びを感じ得る人こそ、眞に修養の道を歩んでゐる人と云へませう。世の中のすべての善行美德も、此の報恩感謝の歡びの中からこそ、初めて生れて來るのであります、私達が日夜受けて居る恩を分けます、父母の恩、國家の恩、社會の恩、神佛の恩、この四種となりますが、之に一々感謝の心をいだく時、人生は至極結構な所となります、されば私達は充分修養して其の様な心の持主には是非ならねばなりませ



次に苦樂と云ふ事を述べませう。尊き人類愛の發露として、世に「苦樂を共にす」てふ言葉があります。苦を共にし、樂を共にす、何れも同じ共にする事ではあるが、人間としての眞の愛とはひとり前者の場合に於てのみ生ずるであらう、凡そ、樂を共にす、如何なる者も之を爲し得る、されど眞に苦を共にする程世に難きものはありますまい。然しながら、苦を共にする事に依つてのみ眞に相互愛を味ひ得るものと思はれるならば、共に苦しむ人こそ最も望ましき事であります。

共に樂しむ事、亦決して望ましくないでは無い、否寧ろ望むべき事であるならんも我は更らに進みて苦を共にしたところ願ふものであります、困苦、艱難、辛勞、窮厄それを共にする時、そこに油然として湧き起る眞の情愛の美しさは如何ばかりであらう。

望んで苦を共にする友戀し。

喜んで苦を共にする友戀し。

廣き世の長き旅路の、懐しくも亦慕はしきものは、糟糠の妻と共に、眞に共苦を望む友でこそあらう。

それから人間は邪氣を去らねば幸福とは謂はれません、邪氣は人間に禁物であります。

邪氣を去るとは、純潔なる子供心を失はざる事であります、天真瀾漫にして邊幅を飾らず、氣取らず、ぶらず、いつまでも氣若々しく、眞率にして徒らに疑心暗鬼を生ぜざる事であります。邪氣あるものは總ての事を眞直に解釋し能はず、又己の事以外に自己の一身を献げて働くなどの喜ばしき境地は味ふ事の出来ぬものであります、殊に青年は邪氣を去りて大いに無邪氣でなくてはなりません、邪氣を去り得て初めて前途洋々春の海の如き希望も生れて來るのであります、又萬難を突破し得べき眞の勇氣も生じ、献身犠牲の尊き勝行も生ずるのであります。要するに無邪氣は青年の誇りで



あつて、又青年の命でありませう。

(ハ) 自らを知れ

我々人間が萬物の靈長として、自然物又は禽獸と異なる所以のものは、自由意識を有して其れに依つて自らの行くべき道、なすべき事を知りて生活を營む所にあります。

自覺的に自己の心事行爲を定めて行く事が人間の彼等に優越した點であり、又神より與へられたる使命を遂行するの所以であります。

聖哲プラトーン「汝自らを知れ」と云つた、我々が世に處して眞に自覺的生活を營まんとするには、先づ自己の何たるかを知らなくてはなりません、眞の自己を知り得てこそ初めて自己の使命の何たるかを悟り、眞に意義ある生活をなし得るのであります。然し他人の是非善悪や世間の事は比較的知り易いけれども、自分自身の事は容易に解り難いものであります。「目は目を見ず」指は指を指さず」自己を本當に正解

することは大なる難事であり、而しながら、我々として自己の何たるかを知らなければ、恰も空手で虎を追ひ、舟なくして河を渡ると同様、甚だ危険なことであります。故に我々は宇宙人生の何たるかを知るに先立ち、自己自身の何たるかを知らねばなりません。自己を知るとは自己の境遇、實力、性格、性癖其他自己の信用、自己の信仰等を知ること、之れを正解するの謂ひであります。而もその正解は自己の因縁を自覺し、自己の無智無能即ち不明を知る事であり、茲に至つて初めて自己の正しい姿を見ることが出来、そこに煩悶生じ、眞理——神を求むる心を喚起して我々の人格を向上し進化するに至るのであります。

ソクラテス嘗て「余は何事も知らない、たゞ何事も知らざる事を知るのみ」と云つた、彼が自己の無智なるを煩悶し、眞理を追求して止まなかつたその努力は、やがて彼をして古今獨歩の大哲人たらしめたのであります。

ポーロは「嗚呼我が欲する善はこれを行はず、欲せざる惡は之を行ふ、惱める人な



るかな」と云つた、此の煩悶こそ神を求むる心を強く刺戟して彼をして大宗教育家たらしめたのであります。

孔子は「不善改むる能はず、義を見て移る能はず、是れ我が憂ひなり」と云つた、此の歎息の一語こそ、よく一生學に志し、修徳を怠らすして彼をして大道德家たらしめたのであります。

私は思ふ、世の中に眞實自己の不明を知りて煩悶し、眞理を追求して止まざる人、幾程あるであらうか、「私は因縁深いものである、つまらぬものである」と啣ちつゝも眞に自己を知るの明ある人、幾人あるでありませうか、人間といふものは智慧才不才に應じて皆それ／＼自己といふものを數段高く見てゐるのであります、此己惚心から不平、不満、不足、恨み、立腹等諸々の邪念が生じてまゐります、此の高慢心あるが爲に、眞の自己が分からず、眞の懺悔の心も起らず、自己の性格を改造して運命の開拓が出来得ないのであります。そこで先輩は

『人の塵が目につくやうでは、未だ自分の埃が除れないのである』と諭され『阿呆になれ』と三才心を定め』と教へられたのであります、是即ち自己の不明を知れ、汝自身を知れとの意であります。

我々の肉體は神様よりの借物であります、そして因縁の理法に支配されてをるのであります、我々は此の借物の御恩を忘れ、自由意識の濫用から多くの埃を積み因縁を重ねて、自ら病み自ら苦しんで居るのであります、すべての苦惱の元は、皆眞の自己を知らないからであります、されば我々は眞の自己に目醒めて其使命を果すまでは身命を賭して進まねばなりません、勿論そこには必ずや大なる苦痛と困難が伴ひますけれども、その苦勞こそ人間としての最も意義ある生活であり、人生の最大目的たる眞の安心と幸福を受け得らるるところのものであります。

高山樗牛博士、嘗て人の向上に二種の道程あるを説かれた、その一は『自己の大なるを認め、益々奮勵努力して進む』のであり、其の二は『自己の小なるを自覺し、無



能なるを知つて修養する』のであります、「天上天下唯我獨尊」と云つた釋迦は前者に當り、自己の無知無能を知つて修養したソクラテスは後者に相當するのであります、即ち前者は自力難行であり、後者は他力易行であります、別り易く言つて見やうなら『はい／＼と這ひ上る道』であつて、自己の無知無能を悟り、低い優しい素直な心となり、神に縋つて進み行く他力易行の道であります、けれども眞宗の絶對他力本願でもいけません、そこには『惡しきを穢ふて』行く所の自力難行の努力を要する自他の調和があります、故に我々が釋迦の如き偉大なる大導師でない限り、先づ自己の不明を悟り、自己を知りて、あらん限りの努力を捧げて然る後神に凭れて動かさる大安心を得なくてはならないのであります。

(二) 開運榮達

人は誰れでも天賦の能力を有たないものはありません、其の能力を遺憾なく發揮し得ると否とは人生の幸不幸の岐る、追分路であります、社會は個人の集團であつて、

個人幸福はやがて社會の福祉を増す所以であります、されば國家社會の發展する否とは、全く各人各個がその能力を最も多く發揮し得ると否とにあるのであります、國家の隆盛を極めるのは、その能力の最も能く働いたときであり社會の衰頽に赴くのは一に之れが發揚の鈍つて來たときであります、これを以ても知られる通り、各人各個が能力の發揮は常に自己一人の爲めばかりでなく、社會道德の上から云つても重大なことで、徒に之を無にして仕舞ふといふことは、恕すべからざる一種の不道德であります。

況して今日は昔とは全く異なり、その人々の努力次第で如何なる方面に向つてもその能力を伸ばすことの出来るやうな時勢になつて來て居るのであります、之れを是れ知らずして徒らに他人の驥尾に附して、一時の僥倖を夢み、束の間の偷安を欲する如き輩の、何時になつても絶えないのは寔に國家社會のため憂ふべき現象ではありませぬか。



殆んど三百年の長き泰平を保つた封建制度の破壊消滅に歸したのは、無論種々なる原因があり又種々なる必要に迫られて起つたことではあります、云ふまでもなく、彼ア云ふ組織は人間天賦の能力を滅殺し、引いては社會國家の進運を阻害する所から必然時勢の要求に驅られて、之れが轉覆を見るに至つたのであります、その有害無益であつた封建制度に代つて新たに打建てられた明治の文物制度は、五年十年と漸次歲月を重ねるに従つて國民一般が其能力を遺憾なく發揮し得るに至つた事は既に明かな事實であります、その明治も四十餘年で今や大正と改まつたのでありますから、その間確かに明治よりも今日の方が各自の能力を、より能く展ばし得る理由があると思はるるのであります。

然らば如何にして各自の能力を發揮すべきかと云ふに、是れ畢竟自分の事は自分でこれを處理し、決して他に依頼せぬと云ふ、所謂獨立の精神が其の主動力となるのであります、社會萬般の事、素より他人と共同一致して行るのは一方から見ても緊要な

ことには違ひありませんが、それと同時に必要缺くべからざるものは、己れの運は他迄も己れ自身で開拓して行くと云ふ確乎不拔の精神であります、それには又その方面の道も今日では餘程開けて來てゐると思ひます、從來の有様をみても、世の所謂高等教育を受けた者は一般に官吏になるとか、若しくは銀行其他の諸會社に入るのが大多數の目的で、その當時は又創業の際ではあり、それでも充分口のあつたものであります、今では大分その道も塞がれて來た結果、年と共に競争が劇烈となつたのも當然のことで、幸ひにして其志す方へ行ければ宜しいけれども、それは十中僅か一人位なものでありませう。

然るに道は他に幾らもあるものであります、是等の多くは其處に氣がつかずして、無理にも此塞がつた道に割り込まうとするのは大なる誤りで、且つその他に取るべき道なしと思ふのは甚だしい迷ひであります、活眼を開いて社會を視たならば、そこに行くべき多くの道が開かれてあるのであります、明治十年——二十年——三十年——



四十年——大正と繰つて來ると、後になればなる程、新なる道が開けてゐるのであります、早い話が土地の面積から見てもさうであります、北海道、臺灣、朝鮮、樺太、滿洲、南洋と順次に開けて來たばかりでなく、世界の何處にもその行くべき道を見出すことが容易になつて來た上、生活状態そのものも頗る複雑になつて來て、明治の初めには裏店などでは決して使はれなかつた白砂糖が、今では如何なる貧民窟の住人にも使用され、嘗ては思ひも寄らなかつたバナ、の如き果物がドン／＼間食に供せられるやうになつて來ました様に、其の日常執る所の職業の數も著しく殖えてゐるのであります、斯くて行くべき路もあり、能力を發揮し得べき餘地も充分に有しながら自ら進まんとはせず、徒らに他人の踏んだ道を心易きものに心得て、我も彼れもこの道に追隨する結果、遂に競争を生ずるばかりでなく、進退茲に谷まるやうな悲境に到達するのであります。

先人未踏の地、そこに進むべき新なる活路があるのでありますから、如何なる艱苦

も能く忍んで、能く其路を切り開いて行きますならば、艱難は遂に其人を導いて、獨立獨歩し得る自由の天地に到るのであります、十二分にその能力を發揮し、兩手を振つて意氣揚々闊歩し得る場所は、斯る人の前には到る所に在るのであります、この困難を忍耐し得る程度に依つて其人の運が開けると云ふものであります、成程先人の跡を踏襲することは、樂で都合は宜しいが、意氣に生くる男子の愉快を味ふ事は出來ませぬ、殊に先輩によつて開かれた會社銀行等には既に限りがあり、又其行手も既に見えてゐますから、苟もその人にして、普通より以上に腕を展ばさんとすれば、どうしても、他に新たなる進路の開拓に努めなければなりません。

(ホ) 青年立志

維新の豪傑西郷隆盛は、佐藤一齋の『言志録』を讀んで、大に感奮するところがあり、千二三十條もある其中から、一百一條を手抄して之を座右の銘とし、常に其身を律して居ました、其第一番にあるのは、『遊惰を認めて以て寛裕と爲す勿れ、嚴刻を認



めて直諫を爲す勿れ、私欲を認めて以て志願となす勿れ」と云つてあります、遊惰と寛裕、嚴刻と直諫、私欲と志願との別を明かに識り、之を混合させてはならぬとの意でありませう、遊惰とはブラ／＼と惰けて遊んで居ること、寛裕とは悠然迫らざる形で、決して同一のものではありません、嚴刻とは、嚴しい八釜敷屋のことで、直諫とは、真正直に是を是とし非を非とする形で、之も雲泥の差あるものであります、私慾とは、己れの名利より打算し來るもので、志願とは己れを捨て、人の爲めとか國の爲めとか、但しは學術工藝等の爲め、其志を立つることを云ふのであります、然るに人は皆自惚の強きもの故、遊惰であるのを寛裕と心得、嚴刻であるのを直諫と心得私欲でやつて居ながら人と國との爲に盡して居ると、自ら欺いて居るものが多いので、西郷も先づこゝに注意せねばならぬと考へたのであります。

凡そ人が事を作すには必ず天に事ふる心がなければなりません、天に事へるときか、神に奉仕すると云ふ尊い考の下に活動するならば之を人に示すの念慮はいりませ

ぬ、特立獨行神を目標として進むならば、毀譽褒貶の如きは顧みる必要のないものであります、その爲すべきと思ふ所に向つて邁進すればよいので、之れ即ち、天に事ふるの心、即ち天の使命であると云ふ自覺より湧き出る動作に外ならぬのであります。傑士は獨立自信を貴ぶのでなくてはなりません、熱に依り炎に附くのは凡俗の行爲でありまして、熱して真赤になつて居るものや、熾に炎えて居るやうな人氣のある所へは人が寄つて行くが、ソんな事ではなりません、たと己れの見識で、恚なら恚、恚なら恚と定めて、獨立自信で去就を決せねばなりません。雲煙は已むを得ざるに聚り、風雨は已むを得ざるに漏れ、雷霆は已むを得ざるに震ひ、こゝに至つて至誠の作用を觀るべしで、昔から『至誠已むを得ずして起つ』と云ふ句があります、其雲煙や、風雨や、雷霆に譬へたのであります、名の爲めにあらざ、利の爲にあらざ、國の爲、義の爲め止むを得ずして起つ。斯くすれば斯くなるものぞ知りながら、止むに止まれぬ大和魂



と諸つて首刎ねられた吉田松蔭の如きは正に其人であります、然し西郷や、松蔭を見て、生來至誠の人と思ふてはなりません、よし其質が善かつたにしても、彼等が常に好んで名言を手抄して左右の銘としたり、先輩の偉徳を慕つて修養に勉めたから、大なる目的を貫徹して名を萬代に遺したのであります。

急迫事を敗り、寧耐事を成す、至誠已むを得ずして起つのはよろしいが、然し輕卒に飛び出してはなりません、西郷は熱誠の人であつたばかりでなく、彼は時を見るの明をも持つて居た、何事も輕卒に急いでは事を仕損じます、寧耐即ち靜かに寧んじて忍耐して居ることが大切であります、西郷は随分種々なる壓迫と艱難に遭遇しましたが、よく寧耐の二字を辨へて未だ曾て急迫せず、遂に維新の大業を成就させたのであります。

彼れ是れと心配したり、横道の想や他動的の感が出て來ると云ふのは、まだ志の確立せないためであります、我志さへ確立すれば凡百の邪魔物は閉口して了ふ、彼

の清泉の湧き出づることの激しければ、随つて其流れも激しい、それが爲めに房水の渾入ることが出來ない、男子一たび志を決して起つならば、艱難は固より覺悟の前でなくてはなりません、此の意氣を以て志を立つるならば、政治、商業、學藝の諸界、何れの方面にも進まんとして可ならざるはなしであります、然しこの確固不動の精神を養ふことは、信仰の力に優るものはありません、信仰の對象物は何んでも差支ありません、神でも佛でも乃至は陽明でも孔子でも何んでもよいから、自己の崇拜する所のものを定めて一直線に進めば宜しいのであります。

人の一生は、長途の旅であります、其遭ふところは險阻あり、坦道あり、安流あり、驚瀾あり、是れ氣候の自然で何人も免るゝことは出來ません、即ち變化の天則であります、人はよろしく居に安んじて、慌てず急かす、種々の境遇に處する毎に、よく天意を玩味して、結局は我が爲めになるぞと心得、常に自若として毫も悲觀などしてはなりません、變化極りなき運命を、自ら幸ひに導くには、平然として動かざる精



神の修養が必要であります。

(一) 懐 下駄を穿くな

世間では道理と人情は随分衝突するもので、例へば法律では許さぬことでも、人情ではどうしても許さねばならぬ様な事もあります、此の間を執せず偏せずに進んで誤らぬと云ふのは、随分六ヶ敷ものであります。

兎角人は他人のことに就ては何處迄も理窟を以て裁いて行かうとしますが、さて自分のことになる、そこに人情が出て自分が大切に、理窟はなるべく抜きにして我を立てやうとはかります、かうした所から多くの犯罪も生じて来るのであります、何故ならば、理智の判断が出来なくなつて、情の發するに委せる様になると、情は散亂し易いものでありますから、直に興奮して總てに於て偏するからであります、故に感情に委せることは、最も危険なこと、言はねばなりません。

之に反して自分に對しては飽くまで厳しく些の容赦もせず、白刃を突き付けて之を

裁いて行かねばなりません、他人に對しては飽くまで温かに穏かにして行かねばなりません、或人はこれを己に對しては秋霜に傲れる菊花の如く、他人に對しては春霞に包まるゝ櫻花の如くせよと云つて居りますが、よく此意味を表して居ます、所が、これが多くはあべこべになり易いもので、他人の罪は聲を大きくして責めるが、自分のことは智慧があればあるに委せて、例へ相當の罪があつても裁判を何回も經て、理窟や手段のあり丈けを盡して是を潜り抜け様々します、これは全く道理を無理に押し込めたのであつて、所謂「無理が通れば道理が引き込む」と云ふのであります、さうして是を潜り抜けると「免れて恥なし」と恬然として居るのが今日の有様であります、尙、この法に逆つてもそれを正義だと威張つて居りますが、實は世間普通の正義ではなく、自分にのみ正義である利己正義とでも云ふのであります、此の正義と云ふことも、道義と云ふことも皆解つて居ても、いざ自分の裁くと云ふときになりますと、これも此位はよいから生して置けと許してしまひます、他人の事は、この位なこ



とはと思ふ事でも、いやさうではない『後々が恐ろしい、水の濁り微なりと雖も漸く大器に満つる』と云ふ誓へがあるとか、何んとか理窟をつけて之を糾弾しやうとしまする、故に、此の自分と他人の扱ひ分けは非常に六ヶ敷いものであります。

然らば、何故人はかうしたことが甘く行かないか、何故そんなに六ヶ敷いかと云ふことを考へて見なければなりません、一國の選良と云はる、人達が集まつて協議する議會に於ても、堂々たる人が、まるで成つて居ないことを言つたり行つたりして居ります、それはどう云ふ譯けかと云ひますと、直きに情が出て来て理智を隠すからであります、それで、我等が爲に、我黨の爲に、進んでは我のためにと、種々なる屁理窟を並べ權謀術數を廻らすからであります、それで、すること爲すこと、一直線では行けず、曲り曲つた道を行かねばならず、裏にも尙裏を藏すると云ふ有様であります、人間である以上、人情の入るのは當然ではあります、それが所謂我と云ふものであつて、その我に理窟を附けた裁判などになりますと、俺の云ふことは道理であるから

通らねばならぬと頑張ります、然しそれは道理々々と云ふのも、眞の道理ではなく、それは世間に通用の出来ぬ道理であつて、例へば偽造紙幣の様なものでもあります、此の偽造紙幣を持つて喜んで居ると云ふのが、人間の淺ましい所であり、悲しい所でもあります、假令萬國に通じ、萬世に亘つて正しき道理であるものも、俺の道理と云ふ時は俺の道理になり、俺の情が入りて稍々汚れた道理となつて來ます、或はあの男の云ふことでは、諾く譯けには行かぬと云ふ様なこともあります、それは同じ道理を甲の云ふ時に聞いて、乙の言ふ時は聞かぬと云ふのでありますから、それは道理を聞くのではなくて、人を聞くのであります、蓮如上人は『其志を言ふものは、如何なるもの、言ふことも耳を傾けねばならぬ』と云はれて居るが、それがなか／＼出來難いのであります、縁故のあるもの、言ふことはよく聞かぬが、さうでない人には、種々なる理窟を付けて、道理を押し除けるやうなことが多いのであります、現代は思想が頗る發達して萬民平等を盛んに稱へて居りますが、これは甚だ進歩した傾向でありま



すけれども、それでは誰れの言ふことでも平等に聞かんと云ひますと、到底さう云ふ事は出来ませぬ、自分の言ふことだけが本當であつて、自分と説を同じくするものは是を聞き、他は是を聞かぬと云ふのが現代の思想であります、それで言ふことは、萬人平等四海兄弟である、さて行はんとする時は、自己中心であつて、此の小さな人間の俺さへ立てばよいとして居る、是れが人間の最も淺ましい所でありまして、人情では生かしたいが、道理の上では殺さねばならぬと云ふ場合が屢々あつて、茲が人間の苦しむ惱む所でもあります、神佛は茲を立派に裁断するのであります、凡夫にはそれが仲々容易になし難い所でもあります、善し悪しは知りつゝも、猶情に索かされ、或は情を抑へて理に従はんとするにも涙ながらにすると云ふ女々しき振舞をせなければなりません、世間の百般のことは、職業の問題、倫理の問題、家庭の問題等皆な此の道理と人情の絡み合ひであります、餘程冷靜にして考へなければ、合理的な判断はなし得ないのであります、故に一步を誤ると萬里の懸隔を生ずる事になつて、如何に追

ふても追ふても追ひ付けず、日々後悔の中に日を送らなければなりません、かうした事は、餘程分別のある知識階級者でありますと、自らも許し、他も許して居る人も必ずあるものであります、只それが深いか浅いかの相違であつて、如何なる人にも小さな事でありますから、後悔せずに居ると云ふことが幾何もあるものであります、御信心を頂き、安心を得ると云ふ、宗教的生活をする者でありますならば、普通に目に附かぬと云はるゝ小さな後悔にも氣を附けて、佛の御姿を憧憬せなければなりません。これ位な後悔は何でもない、と自分で裁判をして行くから、段々罪の上塗りをする様なことになつてしまひます、俺のやることは、皆筋道が通つてゐる、間違はないと云ふ人もありますが、それは眞に通つて居るのではなくて、俺と云ふものを無理に通して居るのであります、俺が俺がと考へてゐるが、定命五十年、七十年は古來稀なりと言はれて居る人間が、俺が俺がと力んで見た所で何になりませう、天地の悠久無限なるに比較したならば、太陽の光と螢の光りほどにも當らぬのであります。



大體人間が俺がく云ふのは、餘り自分を信じ過ぎてゐるのでありまして、所謂買ひ冠つて居るのであります、俺の持つて居る智慧を佛の慈悲、神の愛と同じきものと思ひ、無量壽ぢや、無量光ぢや、無礙光ぢや、と言ふても、只だ世間の小さなものに比較して、常に耳に慣れ過ぎて何等の反響をも起さぬのであります、之を言ひ換へると、如來の心を大抵測量して居るのであります、それでは如來の心だと思ふのは自分の心であることになりまして、茲が甚だ恐ろしい間違を生じ易い所でありまして、親鸞の教には、自分で決め込むことが悪い、否な悪いぢやない、それは嘘だと思ふ意味を説かれたものであります、思ふことを全然止めてしまへと云ふのではありませんが、凡夫の思ひや考へに比すれば、如來のそれは到底比べにならぬ大きなものであるのを、それを小さな人間の尺で測らうとするのは及びもつかぬ無理なことでありまして、親鸞の教へは、其通りだから其通りだと思ふと云ふのであつて、それを或は、かう思へ、かう心得よと云ふと、さう思はねばならぬ、さう心得ねばならぬと云ふ様

になつて、第一歩を踏み誤る様になつて來ますから、思はねばならぬと思ふのは、寧ろ法の御姿であつて、自分の思ふのではなくて、如來様は常にさう思つて居られるのであります。

蓮如上人は『心得たと云ふは心得ぬなり』と云はれて居りますが、此の心得たと云ふ自分計らいの小さな後悔は無量であります、慣れ果て、氣にもせないものでありますから、それで大きな後悔が後に現はれて來るのに氣が付かないのであります、即ち此の大きな後悔と云ふのは、人世の終焉でありまして、此の臨終は來年や翌來年の事ではありません、今晚にも來ないとも限らぬのであります、其臨終になつて、何故かうであらうかと概き悔ひても後の祭りでは如何ともすることは出來ませぬ。

吾々は日常生活に於て、良い加減、曖昧に事を片付けて、深い考察もせず世間體を繕ふ様なことをやります、それで我心では濟んだ様に思つても、何處かに傷き嘆き悲しむものがあるのであります、そこで其の嘆き悲しむものは何かと深く探索して



見なければなりません、さう言へば到底世間は渡れぬ、大抵にして置かなければならぬと云ふ人もありませんが、それは詰らぬ妥協性であつて、良い加減の誤魔化し根性であります、故に何事にも親切な心を起し、何事にも細心の注意を拂ふ様にしなければなりません、さうして凡てに就て、こんな事をして置いて良いか悪いかと、一々之を點検して自省する様にすることが肝要であります、これは随分つらい事で、直きに妥協的になり易いのでありますが、よい加減に誤魔化して居るから夜も安氣に寝られるではありませんが、よく／＼考へて見ると到底一睡もする事は出来ぬのであります、それはどう云ふ譯かと云へば、自己本位の恥かしいことのみであるからであります。

或人去る年或る事の爲めに、四晩も苦しんで眠られぬことがありまして、仲々解決が付きませんでした、それはどうしてかと云ふと俺を立てやうとしてゐたからであります、その俺を立てると云ふことを熄めて終つたら漸く解決が付きました、全體俺と云ふものは立つべきものではないのであります、全く捨つべきものであつて、如來を

眞に信じて居るものは、如來のみは無量壽であり生きて居ると考へて、自分は捨てられて居るのだと考へねばなりません、どんなに社會から叱られても仕方がないから、かう思つて考へて行けば何事も圓滿に解決されて行くのであります、然るに理窟で人を押えつけ様としてもそれは駄目でありまして、俺を捨てる所に社會の人も同意をして呉れるのであつて、自分で自分を傷つけた時には、其傷は何時迄も残るのであります、それで自分で傷を付けて置きながら、後から其傷を擦つて見ても其痛さに獨りで泣くのが淺間しい吾々の平常であります、所謂後悔と云ふのがそれでありまして。

親鸞の言葉を借りて言へば、人間は人情だの道理だの理窟だのと云つて世間を渡らうとして居るが、それは末の末まで通つた悠久なる道ではなく、只だ世間の比較から、あれよりも是れがよいと云ふに過ぎぬのでありまして、善いと云ふ事が果して善いか、悪いか、それは吾々の尺にのみ依るものであつて、天地の尺には契つて居らぬのであります、如來様の無限の御慈悲は、吾々の惱みは當然のことであると御容し下



さるのでありますから、吾々は毎度後悔する毎に如來の御慈悲を深く戴かねばなりません。

此の通り行り損ひばかりして居る吾等を不愍な奴と思召されて、一人も残さずお救ひ下さらんとするのが、阿彌陀佛の大慈悲でありますから、此のお慈悲を喜び戴いて御本願を仰がなければなりません、吾々が、詰らぬものでありながら、善くならうとするのは、自分にはまだ力があると思ふ心があるのであります、そこには俺と云ふものが残つてゐます、それでは眞に如來にお委せしたのではありませんから、如來の御力を眞實に頂くことは出来ませぬ、併も尤も注意せなければならぬのは、例へば茲に或人が約束をする、併し都合に依つて此の約束を履行しなかつた、すると約束を破つた爲めに却つて幸福を得たと云ふ現象に遭遇した、そこで、それではツボラにして居る方がよい、約束などは守らぬ方がよい、と思ふかも知れませんが、それは大きな間違であります、自分で自分の智慧のみを信せず眞に如來の御救ひを頂かうとせな

ければならぬと云ふのであります、さて如來は一切衆生をお救ひ下さると云ひますが、今死なんとするのを助けてやらうとする意味の救済と混同してはなりません、宇宙は悉く如來のお宅であります、その限りなき大きなお慈悲の中に、吾々は抱擁されてゐるのであります、此のお慈悲の中に居る吾々は、眞に詰らぬ奴ちやと合點の行く時は、吾々が、如來に救はれ、御信心が頂けて、如來と一つになれる時であります。如來は増さう殖さうとする佛様である事を知らねばなりません。

故に吾々は如來の一部分でありますから、如來に身をも心をも眞に投げ入れて、安らかに柔順に、如來の懷に抱かれなければなりません、それには人情ちや道理ちやと言ふ俺が俺がの智慧分別の下駄を脱がなければ、眞に温かい如來の懷に抱かれることは出来ませぬ、親鸞上人や蓮如上人の御心も是に變りはなく、我々が此の俺と云ふ下駄を脱いで、如來の懷に抱かれる時、理窟は言はずとも御信心の發露する所は悉く、人情にも道理にも逆らはず圓滿に裁斷して行くことが出来るのであります。



●讀者に白す——本書中に痛切に思ひ當る事や轉因の効果を得られた實驗談を御聞かせ下さい又册に落ちぬ點もお聞かせ下さい  
紫 雲

浮人生 因緣看破と轉換法 (終)

大正十四年八月十五日印刷  
大正十四年八月二十日發行

人生因緣看破と轉換法奥付



發行所 東京府北豊島郡巢鴨町一七六八  
著作兼 吉村藤作  
印刷者 東京市芝區田村町十八 高橋清吉  
印刷所 東京市芝區田村町十八 高橋清巧堂印刷所

發行所

東京巢鴨町大塚終點  
振替東京四〇〇七〇番

心友社



296  
136

著者	書名	特價	送料
西村大觀著	圖示靈脈判定術	金壹圓八拾錢	六錢
西村大觀著	神通靈狐使用の口傳	金壹圓七拾錢	六錢
西村大觀著	交靈祈禱術	金壹圓七拾錢	六錢
高橋北堂著	算易 <small>一名そろばん占ひ</small>	金壹圓五拾錢	六錢
藤川悟山著	神祕家相圖解全書	金壹圓八拾錢	八錢
心友社編輯	新三世相大鑑	金壹圓六拾錢	八錢
心友社編輯	通俗五行易指南	金貳圓參拾錢	十二錢
西村大觀述	祈禱術傳習錄	金五圓五拾錢	……
吉村紫雲述	實相判定術	金四圓五拾錢	……
吉村紫雲述	運氣開發術講義錄	金參圓五拾錢	……

發行所 東京替振 巢東 町四 大塚 終七 點 心友社



著者	書名	特価	送料
西村大観著	圖示靈脈判定術	金壹圓八拾錢	六錢
西村大観著	神靈狐使用の口傳	金壹圓七拾錢	六錢
西村大観著	交靈新術	金壹圓七拾錢	六錢
高橋北堂著	算馬一名	金壹圓五拾錢	六錢
藤川悟山著	神傳家相調解全書	金壹圓八拾錢	八錢
心友社編輯	新三世相大鑑	金壹圓六拾錢	八錢
心友社編輯	評解五行易指南	金貳圓參拾錢	十二錢
西村大観述	新術傳習錄	金五圓五拾錢	……
吉村紫雲述	實相判定術	金四圓五拾錢	……
吉村紫雲述	運氣開發術講義錄	金參圓五拾錢	……

發行所 心友社

吉村紫雲講述

# 轉因術講義錄

◆上、下、二卷完結 ◆會費金貳圓也

本講義錄は「人生因縁看破と轉換法」を讀了したる人にして、尙ほ進んで斯道の研究を爲さんとする特志の人の爲めに、上梓せられたるものであります。此因縁看破と轉換法は果して因縁轉換の根柢ある人なるや否を試むる書物でありますから、此書の意味の了解する人ならば本講義錄によつて、人生一切萬事の解決を見ることが出来る、實に終生の寶であります。

本講義錄讀者には、佛敎十二因縁を基礎とせる因明術講義を添附します、因明術は人一生に於ける運勢、其年の運勢、其月の運勢等悉く看破的中する判断法にして、他に賣つて居ない本です。

發行所

東京巢鴨町大塚終點  
振替東京四〇〇七〇番

心友社



終